



## 平成29年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進室

---

**(Citation)**

神戸大学地域連携活動報告書, 2017(平成29年度):1-63

**(Issue Date)**

2018-03

**(Resource Type)**

report

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81010207>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010207>



はじめに

神戸大学が、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業の取り組みを開始して、本年度で3年目を迎えました。本報告書は、COC+ 事業推進の基盤となる、神戸大学の地域連携活動の新たな展開をまとめたものです。各部局のセンター等の持続的な地域連携活動に加え、公募事業での教職員や学生の意欲的な取り組みについて報告しています。

COC+ 事業では、兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学や神戸新聞社、自治体、経済団体等と力を合わせ、地域の課題解決に資する人材育成と学生の地元定着を目指す事業を展開しています。今年度は、教育プログラムの成果として、地域課題を考える人たちのための、シリーズ「地域づくりの基礎知識」の刊行がすすみ、『地域歴史遺産と現代社会』、『子育て支援と高齢者福祉』の2冊が出版の運びとなりました。また、神戸大学では、全学共通授業科目の中で、「地域社会形成基礎論」「ひょうご神戸学」の2科目が昨年10月からスタートし、他にも地域を志向した科目を「地域志向科目」として指定するなど、教育プログラムの充実を進めているところです。これらの取り組みが評価され、COC+ 事業の中間評価では「A」評価を得ることができました。本事業を支えていただきました教職員や学生、事業協働機関の皆様にお礼申し上げますとともに、引き続きご協力をお願い申し上げます。

昨年12月におこなった第3回 COC+ シンポジウムでは、神戸市や神戸大学・兵庫県立大学のイノベーション人材育成に関する取り組みや、神戸大学の学生が進める地域活動などを報告していただき、兵庫県内における地域活性化やイノベーション、地域創生に関する動向を共有することができました。また、学生や教職員の地域での活動報告が行われました。これらの報告が、本学の地域連携活動理解への一助となれば幸いです。

イノベーションの原動力となる知と若者が集まる大学に対する地域からの期待は年々高まっております。本学には地域をフィールドに先導的な活動を進めている教員や学生が多数います。それらの活動をより可視化し、地域の中での大学の存在価値を高めていけるよう、地域連携推進室はその橋渡しをしていきたいと思っております。今後とも、COC+ 事業をはじめ、本学の地域連携活動につきましても、地域の皆様、関係者の皆様からのさらなるご支援、ご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

神戸大学地域連携推進室長

奥 村 弘

# 目 次

はじめに	1
目次	2
<b>第Ⅰ章 地域連携推進室・研究科地域連携センター報告（中扉）</b>	<b>3</b>
地域連携推進室	
人文学研究科地域連携センター	
保健学研究科地域連携センター	
農学研究科地域連携センター	
神戸大学・篠山市農村イノベーションラボおよび篠山フィールドステーション	
人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート	
<b>第Ⅱ章 学内公募事業活動報告（中扉）</b>	<b>33</b>
<b>地域連携事業</b>	
映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携	
国際文化学研究科 准教授 板倉 史明	
「神戸空襲を記録する会」戦災資料に関する学術的調査・整理および利用提言	
国際文化学研究科 教授 長 志珠絵	
複数大学の連携による地域創生事業「地域創生事業と教育・研究を有機的に結ぶ」	
経済学研究科 教授 藤岡 秀英	
高倉台団地再生・活用プロジェクト	
工学研究科 教授 三輪 康一 助教 栗山 尚子	
被災地定点観測を通じた多世代災害語り継ぎと手法の開発	
工学研究科 准教授 近藤 民代	
<b>学生地域アクションプラン</b>	
こどものためのコンサート第10弾	
神戸大アートマネジメント研究会 岩野 ちあき	
神戸市における里山資源利用法の世代を超えた普及と継承	
神戸学生森林整備隊 野口 結子	
地域と世界をつなぎ、篠山の魅力を世界へ	
AGLOC 阿部 大樹	
プロジェクト福良	
プロジェクト福良 山田 千彬	
母子にやさしい街づくり	
母子健康推進プロジェクト 松田 直佳	
慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における呼吸機能評価	
神戸在宅呼吸ケア勉強会 澤田 拓也	
<b>募集要項</b>	
<b>付録（中扉）</b>	<b>59</b>

# **第1章**

**地域連携推進室・**

**研究科地域連携センター報告**

# 平成29年度地域連携推進室活動報告

## 【概要】

平成18年、教育基本法に大学による社会貢献が明記されて以来、大学による社会貢献の重要性の認識が学内外に広がり、地域課題に資する研究や学生の地域貢献活動への期待は年々高まっている。こうした状況の中、本学は、地域との連携事業を通して、社会実装可能な教育研究フィールドの確保が行われ、同時に大学の地域貢献という使命を果たしてきた。さらに、新たな地域課題の解決に資する学内の研究教育基盤を開発することで、全学的な地域連携事業の更なる推進を図るとともに、協定締結自治体等や大学施設の所在する地域との良好な信頼関係を維持する事業についても、地域連携推進室で支援を行っている。

なお、平成27年度に神戸大学が代表となって申請し、採択に至った文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」は、これまでの本学が培ってきた地域連携事業の研究教育社会実装の経験の上に採択されたものである。今後も、代表校として当事業を推進していくためには、本学における地域連携事業の基盤強化がますます必要である。また、COC+ 事業の全国的展開は、地域活性が内政的重要課題となったことを示しており、本学内でも地域課題への対応力の継続的支援が求められている。



地域連携体制図



連携自治体図

## 【地域連携の基本理念】

- ① 神戸大学は、学術文化における地域社会の重要な担い手であることを自覚し、この分野における地域社会のリーダーとして、組織的に地域（連携）活動を進める。
- ② 神戸の持つ国際的港湾都市としての文化的な位置を高め、地域から世界へ発信しうる地域連携事業を展開する。
- ③ 兵庫県の多様な地域社会に対応しながら、そこから地域社会の発展、活性化につながる普遍的な課題を全国に発信する。
- ④ 県内の自治体や地域団体との持続的な連携の継続を進め、長期的な信頼関係を深める。
- ⑤ 地域連携の成果を生かし、関係自治体等に本学の教育研究フィールドを整備する。

大学における地域連携の重要性が年々高まり、平成28年度から、地域連携推進室には、特命准教授が配置されることとなった。安定的に地域の自治体等と信頼構築を築き、大学の機能強化を図るうえでは、恒常的に人員を配置する必要があると考える。

以上に基づき、地域連携推進室では、本年度、以下の事業を行った。

## 【活動報告】

### 1. 本学と自治体との連携事業の推進に関すること

#### ① 神戸大学と篠山市との連携推進協議会（H29.10.18）

篠山市とはこれまで、①地域創造研究、②地域人材育成、③相談・情報発信・活動支援など約56の取組を進めてきた。こうした活動を両者で共有し、新しい連携事業の発展に資するため、関係者を集めた連携推進協議会を神戸大学で開催した。



篠山市との連携推進協議会

### 2. 本学における地域連携の組織的な取組への支援に関すること

#### ① 各研究科地域連携センター等が行う地域連携事業への支援

人文学研究科、保健学研究科、農学研究科の各地域連携センターが行う事業の統括や、今後の事業展開に関する相談、調整、広報支援を行った。自治体等から当室に寄せられる要望などに対し、各地域連携センターにつなぎ調整することで、大学全体の地域連携を推進した。

#### ② 地域連携事業・学生地域アクションプランの公募

当室では、教職員や学生が行う地域活性化に資する新たな取組に対し支援を行うため、平成19年度より公募事業を実施している。本年度は、教員を対象とした「地域連携事業」から5件、学生を対象とした「学生地域アクションプラン」から6件を採択し、支援を行った。

## 地域連携事業（教職員対象）

国際文化学研究科	映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携
国際文化学研究科	「神戸空襲を記録する会」戦災資料に関する学術的調査・整理および利用提言
経済学研究科	複数大学の連携による地域創生事業
工学研究科	高倉台団地再生・活用プロジェクト
工学研究科	被災地定点観測を通じた多世代災害語り継ぎと手法の開発

## 学生地域アクションプラン

神戸大アートマネジメント研究会	こどものためのコンサート第10弾
神戸学生森林整備隊	神戸市キーナの森における里山の資源利用の普及と継承
AGLOC	地域と世界をつなぎ、篠山の魅力を世界へ
プロジェクト福良	プロジェクト福良
母子健康応援プロジェクト	母子にやさしい街づくり
神戸在宅呼吸ケア勉強会	慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における呼吸機能評価

### ③ 灘区「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成」

灘区域における地域活性化に資する事業を灘区が支援する「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成」について学内公募を行った。本学の教員から1件、学生団体から3件が採択された。年度末には、神戸松蔭女子学院大学において「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成報告会&交流会」（H30.1.30）を開催し、事業に採択された教員や学生同士の交流を図った。

人間発達環境学研究科	鶴甲いきいきまちプロジェクト
まちプロジェクト実行委員会	まちプロジェクトーまちTフェス'17
神戸大学天文研究会	なだ星まつり
灘区地域活動センター(N.A.C)	灘区内の災害復興住宅の集会所におけるふれあい喫茶の運営や戸別訪問活動

## 3. 本学における地域との連絡窓口としての連絡、調整に関すること

### ① 神戸市大学連携実務担当者会議への参加

隔月に開催される「神戸市大学連携実務担当者会議」に参加し、神戸市及び市内の大学連携担当者と意見交換を行った。また、「大学交流拠点企画委員会」に出席し、大学側のニーズを伝えた。

### ② 自治体等からの要望に対する窓口調整

#### （1）自治体委員会等への教員派遣

- ・ 兵庫県／地域遺産活用方策検討委員会／教員1名
- ・ 加西市／情報公開審査会委員、個人情報保護審査会委員、行政不服審査会委員／教員1名
- ・ 加西市／第二次加西市食育推進計画策定委員／教員1名
- ・ 三木市／情報公開審査会及び個人情報保護審査会／教員2名
- ・ 三木市／指定管理者選定委員／教員1名
- ・ 中津市／中津市歴史博物館活用推進委員会／教員2名
- ・ 中津市／出前講座／教員1名
- ・ 神戸市／新春国際親善パーティー／教員2名
- ・ 神戸新聞社／銀の馬車道・鉱石の道 日本遺産認定記念シンポジウム／教員1名

## (2) 自治体等主催事業への学生派遣

- ・ 神戸市／神戸の未来をつくる KOBE 学生100人ワークショップ／12名
- ・ 灘区／灘区広報サポーター／2名
- ・ 神戸市／学生活動拠点プロジェクトメンバー／周知
- ・ 神戸市／アドバンストキャリアデザインプログラム／周知
- ・ 神戸市／神戸市シリコンバレー交流育成プログラム／周知
- ・ おいしいお肉と米をつくる循環型の取り組み 牛が篠山にもたらず恵みをもお〜っと知るツアー／周知

## (3) 自治体等主催事業への協力

- ・ 神戸市／洋上大学船「World Odessey」日本人大学生との交流行事／経済学研究科
- ・ 神戸市／神戸のつどい／ポスター作成

## (4) 自治体等からの相談対応

- ・ シスメックス／社会貢献活動に関する相談
- ・ 神戸新聞社／バイオガス 環境・エネルギーシンポジウムにかかる相談

## 4. 「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の事業推進に関すること

平成27年度に地方創生に関する文部科学省の事業として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」が公募され、兵庫県では、本学が中心となって申請した「地方創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」が採択された。事業3年目の本年度は年間58,000千円（うち神戸大学分43,464千円）の予算を受け、事業を実施した。

本事業は、本学のほか、兵庫県立大学、神戸市看護大学、園田学園女子大学、兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、兵庫県経営者協会、兵庫工業会、神戸新聞社が事業協働機関となり進めている。

### ① 事業推進にかかる各種会議の開催

- ・ 第3回ひょうご神戸プラットフォーム協議会（H29. 7. 18）
- ・ COC+ 推進委員会（H30. 2. 13）
- ・ コーディネーターミーティング（16回／年）

### ② 事業推進のための検討（打合せなど）

- ・ 学外機関や学内部署との打合せ（約16回程度）

（学外機関／9つの事業協働機関、テキスト執筆依頼者の所属機関等）

（学内部署／学務部教育推進課、人文学・農学・保健学研究科、都市安全研究センター、キャリアセンター、学術・産業イノベーション創造本部等）

### ③ 外部評価委員会

第三者の立場から客観的に点検・評価し、事業の改善に努め、質の向上につなげるため、第1回ひょうご神戸プラットフォーム外部評価委員会（H29. 6. 29）を開催した。

当日は、評価委員として、藤本清二郎氏（和歌山大学名誉教授 元副学長・理事）、小田一彦氏（京都府農業農村創生センター会長）、鹿島建設（株）社友の安藤進氏の3名の委員が出席し、事業概要の説明の後、意見交換を行った。

④ FD の実施

COC+ 事業に対する教員の認知度を高めるため、各学部を訪問し、FD を実施した。

H29. 6. 16	理学研究科
H29. 6. 21	海事科学研究科
H29. 8. 4	農学研究科
H29. 9. 6	人文学研究科
H29. 10. 6	工学研究科
H29. 10. 13	システム情報学研究科
H29. 11. 15	法学研究科、経済学研究科
H29. 12. 15	国際文化学研究科
H30. 1. 17	経営学研究科、保健学研究科
H30. 2. 16	人間発達環境学研究科



FD のようす

⑤ ひょうご神戸学、地域社会形成基礎論の開講

COC+ 事業の採択に伴い、全学共通授業科目の中で、ひょうご神戸学（1 単位）、地域社会形成基礎論（1 単位）を本年度より新たに開講した。授業はオムニバス形式で実施しており、講師のコーディネートや学生の履修管理など地域連携推進室特命准教授が担当した。

履修者数

開講日	ひょうご神戸学 月曜 5 限	地域社会形成基礎論 木曜 5 限
第 3 Q	27名	42名
第 4 Q	17名	14名



ひょうご神戸学 のようす

⑥ 地域志向科目の指定

専門科目に対する地域志向科目の指定を行うため、各学部へ照会を行った。その結果、191科目について、指定を行うこととなった。なお、指定に際し、全学教務委員会（H29. 9. 27, H30. 1. 24）において地域志向科目に関する説明を行った。

⑦ シリーズ『地域づくりの基礎知識』の刊行

大学が地域住民、自治体、企業などと協力しながら展開してきた地域志向型教育研究の成果をまとめたテキストを神戸大学出版会から刊行した。地域連携推進室及び COC+ コーディネーターが、企画・構成・編集を進めた。

平成30年 1 月刊行	シリーズ 1 『地域歴史遺産と現代社会』
平成30年 3 月刊行	シリーズ 2 『子育て支援と高齢者福祉』



地域づくりの基礎知識シリーズ

⑧ ひょうご神戸プラットフォーム第 3 回 COC+ シンポジウム（H29. 12. 22）

本年度の COC+ 事業を総括するため、昨年度に引き続き、3 回目の COC+ シンポジウムを瀧川記念学術交流会館で実施した。「地域で育むイノベーション人材～新しい挑戦～」をテーマに

大学や自治体などで取り組んでいるイノベーション人材育成の動きを共有することで、地域での新たな人材育成の展開を考える機会となった。

⑨ シンポジウム等支援

各領域主催のシンポジウム等の支開催援を行った。

H29. 7. 5	兵庫県文化遺産防災研修会	歴史と文化
H29. 10. 14	神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学 3大学合同報告会「プラットフォーム」	子育て高齢化対策
H29. 11. 19	講演会「地域を豊かにする相互扶助が生まれるビジネスとは」	イノベーション
H29. 11. 28	兵庫県文化遺産防災研修会 in 播磨西	歴史と文化
H30. 1. 20	篠山市・神戸大学地域連携フォーラム	自然と環境
H30. 1. 27	保健学研究科地域連携センター報告会	子育て高齢化対策
H30. 1. 28	歴史文化をめぐる地域連携協議会	歴史と文化
H30. 2. 9	阪神・淡路大震災の復興／語り部手法の伝達 神戸	安心安全な地域社会
H30. 2. 10	兵庫の防災・地域連携フォーラム	安心安全な地域社会
H30. 2. 11	阪神・淡路大震災の復興／語り部手法の伝達 淡路	安心安全な地域社会

⑩ 大学の地方創生事業に関する情報収集

他大学のシンポジウムや地元企業を訪問し、地域創生に関する情報収集を行った。

- ・香寺ハーブガーデン取材 (H29. 10. 12)
- ・地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成 (H29. 11. 26 於：三重大学)
- ・関西における COC 事業の成果と今後の展開 (H29. 12. 4 於：I-site なんば)
- ・COC+ 報告会「若者が活躍するまちづくり」(H30. 1. 22 於：長崎大学)
- ・COC フォーラム (COC 事業 5 年間の取組みと地域連携教育) (H30. 1. 27 於：神戸市看護大学)
- ・地域創生と地 (知) の拠点大学としての大学～兵庫県立大学 COC 事業の取組みから～ (H30. 2. 8 於：兵庫県民会館)
- ・園田学園女子大学 COC 事業 成果報告会 (H30. 2. 10 於：園田学園女子大学)
- ・平成29年度 COC/COC+ 全国シンポジウム (H29. 3. 2 - 3 於：高知県立県民文化ホール、高知商工会館)

⑪ COC+ 参加大学が実施した下記シンポジウムに協力した。

- ・大学 COC+ シンポジウム「地域歴史遺産としての『営みの記憶』 - 災害復興の現場から -」(H29. 7. 22 於：園田学園女子大学)

5. その他地域連携の推進に関すること。

① 連携機関や市内大学等との懇談会への陪席

- ・神戸市長と学長との懇談会 (H29. 12. 15)

② 広報活動

本学の地域連携活動を広く発信するため、「地域・だいがく連携通信」(年2回)を発行した。また、地域連携推進室の及び大学のホームページにて、事業の告知や活動を逐次配信している。

# 平成29年度人文学研究科地域連携センター活動報告

(2018年1月現在)

大学院人文学研究科（文学部）では、平成14年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年11月には地域連携研究員制度を創設し、翌年1月には、学内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成19年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して取り組んでいくことを目的とした事業である。

現在、連携事業は多岐にわたっているが、おおむね次の四つの分野で事業を進めている。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、平成26年度から始まった科学研究費補助金基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者・奥村弘）のプロジェクトに加えて、平成27年度より、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」のプロジェクトのうち「歴史と文化」領域に関する事業が、当センターを拠点として展開されている。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表もおこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

## （1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

### ①兵庫県との連携事業

#### a 兵庫県文化遺産防災研修会の開催

- ・〔キックオフ研修会〕2017年7月5日（水）（於神大農学研究科B棟101教室）（主催：人文学研究科地域連携センター、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、共催：COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、協力：歴史資料ネットワーク、科研S「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立」研究グループ（研究代表奥村弘）
- ・〔播磨西研修会〕2017年11月28日（火）（於日本城郭研究センター2階大会議室）（主催：人文学研究科地域連携センター、兵庫県教育委員会、共催・協力同上）

#### b 兵庫県地域創生局地域遺産室との連携

- ・2017年9月12日、地域遺産活用方策検討委員会の第1回会議が開かれ、奥村が座長に就任



c 兵庫県地域創生拠点形成支援事業（園田学園・香美町との連携）※ COC+ も関連

・2017年6月1日付で補助金交付決定（\250,000）

・6月4日園田学園女子大学香美町サテライトスタジオ開所式に木村ほか出席。その後、7月29～30日、8月25～7日、11月3～4日、12月26～7日に香美町小代地区の同スタジオへ出張、同所保管の旧美方町史編纂関係資料の調査・整理作業、小代地区内の巡検、地域住民との交流を実施。2018年3月に小代地区区内で現地成果報告会を実施予定（園田学園と連携）

## ②神戸市における連携事業

a 神戸市教育委員会との連携事業

・神戸村文書の研究と成果の公開事業；神戸市立中央図書館所蔵「神戸村文書」の読解、研究  
・市民向け古文書講座の開催；2017年11月13日（月）（於こうべまちづくり会館）、11月20日（月）（於同前所）、11月27日（月）（於同前所）、12月2日（土）（於神戸市立中央図書館）

b 財団法人住吉学園（住吉財産区）との連携事業

・本住吉神社所蔵文書を中心に翻刻作業および古文書勉強会を実施、併せて西摂の地域史研究を実施  
・2017年3月30日『阪神・淡路大震災資料集Ⅱ 住吉の記憶「住吉西区と阿彌陀寺」』発行。引き続き阪神大震災関連の聞き取り調査を実施、今年度末に『阪神・淡路大震災資料集Ⅲ』発行予定

## ③神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

・神戸大学附属図書館所蔵古文書調査：社会科学系図書館貴重書庫所蔵湯浅家（大黒常是）文書の整理完了、解題とともに目録を図書館 HP データベースへ掲載

## ④協定に基づく小野市との連携事業

a 小野市小野地区歴史調査

b 伊藤家文書を活用した小野市域の幕末・明治期の歴史研究

c 企画展「小野藩士族が見た西南戦争」会期：2018年2月17日～4月8日（於小野市立好古館）への協力

## ⑤連携協定に基づく朝来市との連携事業

a 石川家文書整理会の指導・助言

b 生野書院企画展「石川雀翁の世界」への協力

c 奥銀谷自治協議会での山田家文書の展示（3月予定）

d 多々良木地区における区有文書の整理

e 旧和田山町域の歴史資料調査

## ⑥丹波市における連携事業

a 連続歴史講座「楽しく学ぶ、丹波の歴史遺産」（共催：丹波市教育委員会）：

第1回2017年6月24日（土）（於ハートフルかすが）講師

第2回2017年7月15日（土）（於氷上住民センター）講師



前田結城

西岡真理

第3回2017年10月15日（日）（於ライフピアいちじま）講師 小野塚航一

第4回2017年11月18日（土）（於青垣住民センター）講師 平岩泰典

第5回2017年12月2日（土）（於柏原住民センター）講師 津熊友輔・出水清之助

第6回2018年1月20日（土）（於山南住民センター）講師 黒田龍二

b 特別展示「ミニ企画展 上山家文書にみる幕末維新の丹波」：2017年2月28日（火）～3月19日（日）於丹波市立柏原歴史民俗資料館

c 市内古文書等調査

・氷上町氷上区有文書調査：2017年7月1～2日、11月26日、12月11日

・春日町歌道谷区有文書の保管状況追跡調査：2017年8月20日

・春日町棚原区有文書調査：2017年12月18日

d 丹波古文書倶楽部の開催支援

・月1回の例会実施（第2土曜、講師木村修二）／10月14日フィールドワーク実施

#### ⑦連携協定に基づく加西市との事業

a 青野原俘虜収容所関連の資料収集

b 加西市小谷地区の歴史文化遺産調査、および成果物の発行

#### ⑧篠山市との連携事業

a 「地域資料整理サポーター」活動への協力：丹南町史編纂史料目録作成作業計6回実施、史料整理サポーター有志と篠山市内巡見（8月、大山・雲部地区）

b 篠山市立中央公民館主催古文書入門講座（中西家文書を使用して2回講義）

c 「丹波篠山の日本遺産をめぐる篠山ウォーキングツアー」への参加（12月、八上城跡などを見学）

#### ⑨尼崎市における連携事業

・尼崎市立地域研究史料館の専門委員として市沢が同館の運営に協力

#### ⑩連携協定に基づく三木市との連携事業

a 新三木市史編さん事業

・「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」（平成25年6月締結）に基づく、受託型協力研究（三木市史編さん事業）実施

・地域編部会（口吉川部会、志染部会）活動の助言指導

・『市史研究みき』、『市史編さんだより』編集

b 三木市立みき歴史資料館事業への協力

・2017年12月10日（日）（於みき歴史資料館）企画展「地域の史料たちⅡーみんなが主役の市史編さんー」特別講演会『『新三木市史』と歴史文化を活かしたまちづくり』（奥村）

c 旧玉置家住宅文書保存活動

・市民グループ「旧玉置家文書保存会」に対し整理活動について助言

#### ⑪明石市との連携事業

a 「明石市における地域史料の調査研究業務」

・大久保町安藤陽家文書調査（計4回、のべ8日間）

・後述、明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界Ⅴ 明石藩の幕末維新」への協力（前掲安藤陽家文書の出展・解説）

b 「明石藩関連資料調査・公開業務」

・明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界Ⅴ 明石藩の幕末維新」会期9／16(土)～10／22(日)

- ・記念講演：2017年10月7日（土）：前田結城、加納重由子（明石文博）講演
- ・ギャラリートーク：2017年9月16日（土）、30日（土）
- c 明石市史編さん関係
- ・二見町福里大西家文書調査：2016年3月18日～1月23日まで計10回
- ・明石市史近代史部会 2017年5月13日（土）、2018年1月12日（金）
- d 明石市立文化博物館所蔵横河家文書調査・公開業務
- ・調査・撮影作業：2017年6月3～4日（土日）、8月23日（水）・28日（月）

⑫たつの市に関する連携事業

- ・神戸大学近世地域史研究会：月1回・日曜日開催。開催日：平成29年4月16日、5月28日、6月18日、7月16日、9月3日、10月1日、11月5日（福崎町辻川フィールドワーク）、12月3日、平成30年1月21日。以降2月18日、3月18日予定

⑬佐用町との連携事業

a 利神城跡関連

- ・利神城跡の国史跡指定に関する準備への助言
- ・利神城跡国史跡指定記念シンポジウム（2017年12月17日於佐用町）のコーディネーターを市沢が担当

b 「佐用町域における文化財ハザードマップづくり」

- ・2009年台風9号の被害を受けた佐用川流域の浸水シミュレーション結果と、その周辺に所在する歴史資料の被害状況を重ね、文化財ハザードマップの精度向上のための作業を実施。協力：佐用町教育委員会藤木透氏（現地情報）、神戸大学工学部小林健一郎氏（シミュレーション作成）

⑭福崎町との連携事業

a 福崎町立柳田國男・松岡家記念館展示

- ・次年度展示に向けた松岡静雄関連資料の調査
- ・松岡家関連資料の目録化作業

b 福崎町域に残る民具をまとめたパンフレットの作成

c 『広報ふくさき』誌上での調査・研究成果の還元

d 大庄屋三木家の民具調査

⑮猪名川町における連携事業

- ・「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」（猪名川町・兵庫県立歴史博物館・関西大学との共同研究）に参画（奥村弘・木村修二・山本康司）。調査最終年度につき、まとめ作業が中心。2018年2月17日（土）町民向け報告会予定

⑯姫路市香寺町における連携事業

- ・香寺歴史研究会：2018年2月15日講演会にて木村講演予定（於姫路市立香寺公民館）

⑰協定に基づく大分県中津市との連携事業

- ・中津市歴史博物館（仮称）活用推進委員会への協力：委員長に奥村委嘱、副委員長に松下委嘱、2017年7月27日第1回委員会、2018年2月2日第2回委員会



## ⑱協定に基づく人間文化研究機構および東北大学との連携事業

- ・2018年1月26日、人間文化研究機構と東北大学、そして本学の三者で、大規模災害時の地域の歴史資料の保全、および地域文化の継承と創成のための実践的研究についての協定を締結
- ・史(資)料ネットワークの事務局を設置されている全国の大学と歴史資料の保全・活用について協議：2018年1月20日岡山大学、1月31日愛媛大学。また2月10日東北大学、3月8日鳥取大学、同9日島根大学も予定

## (2) 歴史資料・災害資料の保全・活用

### ①歴史資料ネットワークへの協力・支援

- ・奥平野村古文書勉強会：例会開催(毎月第2日曜日)、チューター木村修二担当

### ②石川準吉関係資料の調査

- ・昨年度に引き続き、同資料の調査・研究を継続

### ③附属図書館震災資料への協力

- ・企画展「阪神・淡路大震災と地域の復興—23年目の神戸と地域・コミュニティの課題—」(平成30年1月11日(木)～2月1日(木)、於神戸大学附属図書館・社会科学系図書館)に協力

### ④人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

- ・2017年8月より人文学研究科所蔵御影村文書目録校正作業を実施(週2日)

## (3) 地域歴史遺産を活用できる人材の育成

### ①現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供

- a 地域歴史遺産保全活用基礎論A、B：地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義(リレー形式。第1Q第2Qは月曜1限、第3Q第4Qは金曜1限に開講)

- b 地域歴史遺産保全活用演習A、B：第2Q古文書を用いた合宿形式の演習を開催(8月30日～9月1日於篠山市)。第4Q市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を2月15～6日開催予定(於三木市)

### ②教員養成GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動

- ・「地歴科教育論C」の開講(前期)

### ③平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

#### a まちづくり地域歴史遺産活用講座の開催

- ・「まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来」2017年5月21日(日)、於朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」、主催：朝来市、共催：人文学研究科地域連携センター
- ・神戸大学文学部公開講座、2017年10月15日(土)・16日(日)、於神戸大学文学部、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会・COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区

- ・2018年3月3日(土)「まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 三木」開催予定

朝来市主催 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター共催  
まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来

近年各地で、地域歴史遺産を活用したまちづくりの取り組みが、住民自らの手で進められています。この講座は、こうした取り組みに関心を持つ市民のみなさんに向けて、地域の歴史についての考え方や見方を学ぶ機会を提供する予定です。  
「こういう考え方がある」「こういうこともできる」など、地域の歴史に関心を持って、地域づくりに役立てていく入口になればと考えています。

2017年5月21日(日)  
会場：朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」 体験学習室  
(朝来市埋蔵文化財センター 91番地2)

募集人数：20名 ※定員に達し次第締め切ります  
受講料 無料

講座スケジュール

10:00～10:05	開講挨拶
10:05～11:05	開講あいさつ 地域歴史遺産とまちづくり(30分)
11:05～11:10	休憩
11:10～12:10	地域の歴史について考える(10分)
12:10～13:10	「こういう考え方がある」「こういうこともできる」など、地域の歴史に関心を持って、地域づくりに役立てていく入口になればと考えています。
13:10～14:05	地域歴史遺産活用基礎論A
14:05～14:10	休憩
14:10～14:25	まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来
14:25～15:25	まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来
15:25～16:25	まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来
16:25～17:00	閉講挨拶

主催：朝来市  
共催：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
TEL 079-670-7350 FAX 079-670-7333  
〒658-0001 神戸市灘区御影4丁目1番地14  
講座開催時間 9時～17時  
お問い合わせ 事務局

会場 朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」  
〒658-0001 朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」  
TEL 079-670-7350 FAX 079-670-7333  
〒658-0001 神戸市灘区御影4丁目1番地14

b オプションプログラム古文書解読初級講座の開催（2017年10月31日、11月14日、21日、28日）、  
於：文学部学生ホール、講師：河島裕子氏、主催：人文学研究科地域連携センター

#### (4) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

##### 第15回歴史文化をめぐる地域連携協議会

- ・テーマ「住民主体の〈地域史づくり〉—平成大合併後の状況の中で—」（平成30年1月28日（日）、於：瀧川記念学術交流会館、94名参加



#### (5) 地域連携センターを拠点とするプロジェクト

①平成26年度～30年度・科学研究費助成金・基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」

a 「兵庫県文化遺産防災研修会」（2017年7月5日（水））、  
「兵庫県文化遺産防災研修会 in 播磨西」（2017年11月28日（火））へ協力

b 第16回歴史文化をめぐる地域連携協議会（平成30年1月28日（日））を共催

②地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」

a 奥村弘・村井良介・木村修二編『地域づくりの基礎知識 1 地域歴史遺産と現代社会』（神戸大学出版会発行）の編集・刊行：2018年1月20日発行

b 人文学研究科地域連携センター主催諸イベント（兵庫県文化遺産防災研修会、まちづくり地域歴史遺産活用講座、歴史文化をめぐる地域連携協議会等）を共催・後援



#### (6) 地域連携研究と研究成果の公表

①年報『LINK【地域・大学・文化】』9号の刊行

- ・平成29年12月刊行、特集「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」、本文144頁

②地域関連研究

a 地域連携センタースタッフによる科学研究費補助金研究：4件

b 講演、市民講座等への出講多数

# 平成29年度 保健学研究科地域連携センター活動報告

## [概要]

平成29年度の保健学研究科地域連携センターは、委員10名からなる委員会によって運営されてきた。事業としては、①周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援、②就学前の発達障がい児とその家族に対する支援、③重度な障がいを持つ子どもたちへの医療的ケア支援、④国際的視点から見た地域連携、⑤医療と福祉の連携による障害者への生活支援、⑥地域高齢者・認知症の方とご家族への支援、⑦思春期・青年期の発達支援、⑧児童発達支援事業所・放課後等デイサービス事業所に対する巡回支援、⑨須磨地域在住高齢者との関わり、⑩母子にやさしい街づくりの10事業を実施した。各事業の成果は、平成30年1月27日（土）に地域連携活動報告会（神戸市教育会館）で担当事業の委員および学生が報告した。

さらに、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地方創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業では、本センターは“子育て高齢化対策領域”を担い活動を行った。

## [活動内容]

### ① 周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援

極低出生体重児（出生体重1,500g未満の赤ちゃん）とその家族を対象とした“YOYOクラブ”を、神戸市総合児童センターにて毎週火曜日に開催している。現在、出生3カ月～2歳6か月までの4クラスを運営しているが、出生体重が300～400g台という大変小さく生まれた子ども達も参加している。通常クラスに加え、夏祭り（7月25日）、遠足（10月3日・17日）、クリスマス会（12月5日・12日）を実施した。また、YOYOクラブ在籍中の家族だけでなく、OB・OGなど誰でも参加できる合同プログラムとして、4回の研修会・交流会を実施した。神戸大学大学院保健学研究科、甲南女子大学臨床心理コースの大学院生がボランティアとして参加している。保護者からの協力を得て、共同注意や睡眠発達に関する研究が継続的に実施されており、貴重な研究フィールドとしても活用している。



須磨水族園に遠足



教室の風景

## ② 就学前の発達障がい児とその家族に対する支援

「灘ぽっとらっく」(のびやかスペース“あーち”)、「すまいるぽっとらっく」(青陽須磨特別支援学校)は、就学前の“発達が気になる子ども”とその家族のための教室である。この2つの教室では、保護者が発達障がいについて学ぶ講習会プログラムと、学生・保育士・保健師・地域ボランティアの託児による子どもプログラムを、毎月1回実施している。2017年度には計21回実施した。また、8月6日(日)には神戸市青陽須磨支援学校で、就学後の集いを開催した。以下に「すまいるぽっとらっく」の講習会プログラムを示した。

### 2017年度 すまいるぽっとらっく講習会プログラム

4月8日	すぐに癇癢やパニックになるお子さんの感情コントロール	ぽっと代表 山根弘子
5月13日	家族を含めた支援	大阪国際大学短期大学部 准教授 松井学洋(保健師・看護師)
6月10日	アプリで作るサポートブック	神戸親和女子大学教授 石岡由紀
7月8日	障害のある子どもと運動	NPO 法人 アスロン 青木 智
8月6日	就学後の集い	神戸大学保健学研究科 高田 哲 神戸市教育委員会 特別支援教育課 指導主事 青陽須磨支援学校(高等部)の紹介 青陽須磨支援学校 教頭
9月9日	特別支援学級での生活について	神戸市教育委員会
10月14日	泣いたり笑ったり	森山和泉(クリエイター)
11月11日	わが子の発達支援マップづくり	神戸医療福祉専門学校講師 泉 和男(言語・聴覚療法士)
12月9日	クリスマス会(家族で音楽を楽しもう)	古川和香子(音楽療法士)
1月27日	地域連携報告会	神戸市教育会館にて
2月10日	発達障害のある子どもの成長 - 思春期の課題 -	星の子 松井さん 家族としての支援
3月10日	すまいるぽっとらっくを通じた子どもと学生の育ち	くらしき作陽大学 准教授 中塚志麻

### ③ 重度な障がいを持つ子どもたちへの医療的ケア支援

神戸市教育委員会と協力して、特別支援学校において教職員が経管栄養などの医療的ケアに安全に参加できるシステムづくりを行っている。研修事業の立案のほかに各学校への巡回指導、修学旅行、キャンプへの小児科医師付き添いを兵庫県立こども病院、にこにこハウス療育センターと協力して実施してきた。本事業の概要は「医療的ケア児の支援モデル」として高く評価され、文部科学省特別支援教育課「季刊 特別支援教育67号」2017年9月号において、「学校での医療的ケアを支える地域でのネットワーク —神戸市の場合—」として紹介された。また、日経ラジオ医療従事者向け生涯教育番組「小児科診療 UP-to-DATE」において、「医療的ケアの必要な子どもたちの学校における支援」のタイトルで、2018年3月7日にその概要と今後の方向性について放送される予定である。

### ④ 国際的視点から見た地域連携

2007年度からインドネシア・ジャワ島中心部地震の被災地バンツール地区において、ガジャマダ大学（UGM）と共同で「子どもの家」を運営してきた。災害医療、在宅医療、地域保健に関連する知識を共有するために、研究者、学部学生、大学院生間の交流を実施している。その一環として、2017年10月12日から18日まで、ガジャマダ大学よりヘリニ教授以下医学部スタッフ5名と小児看護学修士コースの大学院学生8名を受け入れた。彼らはCOC+を含む保健学研究科地域連携センタープログラムに参加した。また、2017年12月21日には、ガジャマダ大学と連携してジョグジャカルタにおいて、第13回 International Seminar on Disaster, Gender Perspective を開催した。本国際セミナーの実績などを基盤として、2018年度からはユネスコチェア・プログラムへとさらに発展・展開を予定している。



神戸市総合児童センターでの講義（10月12日）



神戸大学・UGM 連携の国際セミナー（12月21日）

### ⑤ 医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業

学生の障害者福祉施設でのボランティア活動、地域交流事業における後方支援、障害者福祉施設に勤務するケアスタッフの実践力向上の支援（学習会）を柱として事業を展開している。

平成24年度より、障害者福祉施設内のボランティア活動だけではなく、施設利用者の方の外出機会支援の一環として保健学科学園祭「名谷祭」への参加支援を開始し、今年度は利用者6名、学生ボランティア8名が参加した。

ケアスタッフに対する実践力向上支援の機会として、平成29年度は「認知症の初期症状と、その対応」をテーマとした学習会を開催した。

#### ⑥ 地域高齢者・認知症の方とそのご家族への支援

認知症患者は増加の一途をたどっているが、地域における認知症予防・支援は極めて大切な課題である。本事業では、市民および医療福祉専門職者の協働による認知症予防・治療・介護を中心とした支援活動に力を注いでおり、1) 在宅認知症高齢者のご家族、及び医療福祉関係者への研修会を通じた啓発・実践力向上支援、2) 地域高齢者へ認知症に関する講演会・認知症予防支援、といった活動を行っている。今年度はとくに2) に焦点を当てた活動を行い、①認知症予防に関する講演とタッチパネルを用いた無料検診、検診後の相談（6月29日）、②新たな試みとして地域高齢者への認知機能と意欲の向上を目的とした活動プログラム（11月22日）を実施した。

#### ⑦ 思春期・青年期の発達支援

神戸市発達障害者支援センターと連携して行っている思春期・青年期発達支援事業で、相談事業の「あっとらんど」（月4回実施）と居場所事業の「Be・ユース」（月2回実施）の2つの部門があり、発達上の問題をかかえる青年とその家族への支援を目的に活動している。相談事業では臨床心理士が中高生とその家族を対象にカウンセリングを実施し、居場所事業では作業療法士が中心となって生活に必要な技能や就労・進学に必要な社会的技術を体験できるような活動を提供し、様々な活動を通して利用者自身の自己理解を促すように支援を行っている。平成29年度の相談事業は面談回数が159回、利用者数は延べ65人であった（平成30年1月時点）。また、居場所事業は、平成28年度の登録者数は9人で、実施回数は16回、延べ利用者数は52人であった（平成30年1月時点）。

#### ⑧ 児童発達支援事業所・放課後等デイサービス事業所に対する巡回支援

神戸市の児童発達支援事業所・放課後等デイサービス事業所を利用する子どもとその家族の支援の充実、事業所スタッフに対するサポートを提供することを目的に、神戸市発達支援者センターと連携して行っている。この事業では作業療法士と福祉職員が連携して、各事業所からの相談（事業運営、設備、個別ケースに関する相談など）を受け、直接事業所に訪問して支援を行ったり、事業所スタッフへの研修（年間2回程度）を定期的に行っている。平成29年度は、30カ所の事業所に対して巡回支援を実施し、事業所スタッフを対象とした研修会を2回開催した。

#### ⑨ 地域高齢者との関わり

高齢者の健康増進や地域連携推進を目的に、須磨区の高齢者を対象とした健康測定会の実施や、地域のイベント（各地域の祭、防災コミュニティなど）への参加・手伝いを行っている。このような地域との関わりは、ふれあいのまちづくり協議会を通して広がった。本年度は10月～11月に菅の台、多井畑、多井畑東町、花谷、南落合地区で健康測定会を実施し、約100名の参加を得た。身体機能や生活習慣、認知機能について測定し、結果や対策をフィードバックした。



### ⑩ 母子にやさしい街づくり

篠山市丹南健康福祉センターの保健師と協力して、母親の健康支援を実施している。骨密度や抑うつ状態など簡単な健康チェックを行い、後日郵送により結果のフィードバックを行った。また、多くの母親が産後に抱えている腰痛に対して、腰痛予防教室を実施し、子育て動作や自宅でできる簡単な運動を指導している。子供の健診に併せた実施や託児所の設置により、多忙な生活の中で母親自身の健康に目を向ける機会を提供している。



### ⑪ 保健学研究科地域連携センター活動報告会

平成30年1月27日（土）に神戸市教育会館にて、保健学研究科地域連携センター活動報告会を開催し、40名の参加を得た。各事業の報告が行われた。

プログラム内容	
1	地域高齢者・認知症の方とご家族への支援事業：今年度の活動
2	COC+ 事業子育て高齢化対策領域 事業報告
3	児童発達支援事業所・放課後等デイサービス事業所巡回支援事業について －神戸市発達障害者支援センターとの連携事業－
4	脳性麻痺のある子どもの日常生活活動
5	自閉スペクトラム症のある子どもの作業遂行能力
6	須磨地域在住高齢者との関わり －地域密着型研究室を目指して－



# 平成29年度農学研究科地域連携センター活動報告

農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐ連結点となり、課題解決や価値創造を図ることを目指している。その使命は、1) 農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2) 大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そのうえで、3) 新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することである。その使命を果たすため、地域共同研究、地域交流活動、相談・情報発信、そして地域と連携した教育プログラムの推進といった事業に取り組んでいる。

以下、事業ごとに、平成29年度の活動の概要を報告する。

## I 地域共同研究

本センターの研究者が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や持続的発展に寄与する調査研究をおこなっている。また、農学部や研究者が地域と共同しながら行う調査研究や事業を支援している。下記、平成29年度の地域共同研究である

### ■所属研究員による調査研究

1. 地域資源の管理・利用とコミュニティ再編に関する研究 木原弘恵 (特命講師), 岡山県笠岡市白石島公民館
2. 移住・定住促進と農業の多角化推進の相補関係に関する研究 衛藤彬史 (学術研究員), 兵庫県養父市, (一社) 田舎暮らし倶楽部
3. ICT を活用した新たな公共交通システムの実装に関する研究 衛藤彬史 (学術研究員), 京都府京丹後市, NPO 法人 気張る!ふるさと丹後町
4. 中山間地域農業の資本生産性に関する研究 衛藤彬史 (学術研究員), 兵庫県篠山市, 吉良有機農園
5. 複数集落の連携による地域資源管理に関する研究 衛藤彬史 (学術研究員), 兵庫県篠山市, 草山地区
6. 規格外農産物に新たな価値の創出を目指した地域連携商品の開発 板垣順平 (学術研究員), 岡野ふるさとづくり協議会, 丹波栗菓匠大福堂
7. 農産物の選別時における「経験知」とモノの相互交渉に関する研究 板垣順平 (学術研究員), 兵庫県篠山市, 岡野ふるさとづくり協議会
8. 産学官による自然共生型産業の創出に向けた実践研究 板垣順平 (学術研究員), 内田圭介 (学術研究員), 中塚雅也 (准教授), (株) 坂ノ途中, 認定 NPO 法人 テラ・ルネッサンス
9. 篠山市における山林資源の循環活用 内田圭介 (学術研究員), ササノワ LLC., NPO 法人 バイオマス丹波篠山

### ■農学部の学生・研究者による調査研究

1. 人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発 長野宇規 (地域共生計画学), 兵庫県篠山市

2. 新しい株間除草機構を用いた水田での実験 庄司浩一 (生物生産機械工学), 真南条営農組合
3. 東播磨地域におけるため池管理の課題と方向性 中塚雅也 (農業農村経営学), 兵庫県東播磨県民局地域振興室ほか
4. 地域固有性の発現と農村発展モデルの確立 中塚雅也 (農業農村経営学), 大芋活性化委員会, 福住地区まちづくり協議会
5. 駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究 鈴木武志 (土壌学), 農都ささやま外来生物対策協議会
6. 新しい特産品づくりに関する研究－“香りヤマナシ”栽培の可能性－ 片山寛則 (食資源教育研究センター), 真南条営農組合
7. 農村地域を支える小規模企業者の事業承継に関する意識－兵庫県篠山市を事例として－ (卒業研究) 金城亜優 (学部生), 中塚雅也 (農業農村経営学), 篠山市商工会
8. 野生動物の環境化学物質への被曝量と環境影響 (卒業研究) 杉田暁佑 (学部生), 星信彦 (動物分子形態学), 篠山市猟友会

## II 地域交流活動

### ■研究会・セミナーの開催

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し地域の発展につながるような取り組みを実施している。とくに、地域連携研究会 (A-launch) は、地域での実践活動並びに農学の先端研究・理論に気軽に触れる場、話題提供者と討論する場として主催している。平成29年度の研究会・セミナーの開催は下記のとおりである。

#### 1. 地域連携研究会 (A-launch)

7月25日「動物系の研究者が良く間違える統計」

話題提供：横山俊史 (動物分子形態学)

#### 2. 地域連携セミナー

7月27日 “Perspective on Agricultural Policy in the UK”

進行：中塚雅也 (農業農村経営学)

### ■学生地域活動サポート

本センターでは、地域と連携した取り組みを進める学生団体に対して、活動に関する情報提供、情報発信の補助、相談対応等、各団体の取り組みが充実するよう支援を行っている。平成29年度は、6つの団体 (ささやまファン倶楽部、にしき恋、サンセット12、AGLOC、おくものがたり、ぶさべじ〜ぶさいく・べじたぶる〜) の活動を支援してきた。本年度は、農林水産省主催の「食と農林漁業大学生アワード」選考会 (11月4日) のファイナリストとして選出された学生団体 (にしき恋、AGLOC) を対象に、活動発表の練習会を実施した。支援している団体のうち、兵庫県篠山市で活動をおこなう団体は「篠山学生活動団体連絡協議会」を組織しているが、活動をより充実させるために、地域での活動を相互に共有する目的で会議を定期的に行っている。本センターのスタッフも、その会議に参加し、各々の団体の活動内容を共有しながら、必要に応じて情報提供を行った。

また、本センターは、平成25年度より、活動地域で生産した農作物を、学生団体が販売する

直売所「ささやま家（や）」を主催し、学内の教職員や学生等に、各団体の活動を発信し、幅広く認知してもらえよう努めている。本年度は計4回実施した。なお、販売収益は、活動で要する交通費等の活動資金に充てられている。この場合は、活動の発信を行う場として機能するだけでなく、農作物の生産に携わった学生が、販売までの過程を経験できる貴重な教育機会となっている。

そのほか、地域活動支援として、オフィスアワーを設け、農学部の学生や活動団体からの地域連携に関する相談に対応した。

### ■農村ボランティア「ノラバ」事業

本センターでは、農村ボランティアバンク KOBE「ノラバ」の事務局として、ボランティアを要する農家と大学生のマッチングをおこなっている。平成29年末の全体登録者数は640名、マッチング数は16件であった。



## Ⅲ 相談・情報発信

大学と地域をつなぐ拠点として、日々、所属するスタッフが相談に応じたり、情報発信を行ったりしている。

平成29年は42件の相談が寄せられた（1月～12月）。相談内容は、学生の地域活動やイベント等、広報協力依頼の相談が若干多めではあるが、その内容は多様である。

また、行政による農業インターンシップの紹介をはじめ、地域活動に関する情報を、ウェブペー



ジや SNS を通じて、随時発信している。本年度の神戸大学のオープンキャンパス（8月10日）では展示を行い、本センターの設置目的や取り組みについて紹介した。

#### IV 食農コープ教育プログラムの運営

神戸大学農学部では、食や農の現場において課題解決に貢献できる人材の育成を目指し、「食農コープ教育プログラム」に取り組んでいる。協力教員とともに、本センターはこの教育プログラムに位置づけられた次の3つの科目の運営支援をしてきた。

##### ■実践農学入門

地元農家を指導員とし、農作物の栽培や、様々なむら仕事を体験しながら、農業や農村生活の理解を深めることを目的としている。平成29年度は、西紀中地区里づくり振興会（兵庫県篠山市西紀中地区）に受け入れていただき、12戸の農家のもと、計44名の学生が、黒大豆の栽培をテーマに実習を行った。

##### ■実践農学

持続可能な農業農村の発展に関する現場で、調査やインターンシップ型プロジェクトに参加し、実践的な学習を行い、農村地域の産業・環境・社会を理解する基礎的な技術や能力、および企画立案や調整の能力を身に付けることを目的としている。本年度は、履修者が計28名であった。調査型プロジェクトである森づくり班は神戸市や篠山市にて演習を行い、インターンシップ型プロジェクトは篠山市大芋地区、篠山市地域おこし協力隊、後川上の西生産組合女性部、JA 丹波ささやまといった受入先において演習を行った。

##### ■兵庫県農業環境論 A / B

兵庫県の農林水産業の施策や事業に関わる方々から、日本における兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開等の話をうかがうとともに、適切な対策を提案できるようワークショップを実施した。

# 平成29年度神戸大学・篠山市農村イノベーションラボおよび 神戸大学篠山フィールドステーション 活動報告

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボおよび神戸大学篠山フィールドステーションは、神戸大学と篠山市が連携し、地域の発展に資する研究と実践的な人材育成を目指し、実験室・実験圃場ではない、生きた現場での研究・教育活動を進めるための拠点施設である。学生や研究者が篠山市で活動するための情報収集・研究支援の場、知識と大学のネットワーク再生の場となることを目指している。2017年度は、大きく以下の3つの事業（地域創造研究、地域交流活動、人材育成、情報発信・地域活動支援）を推進した。

## I 地域創造研究

本年度は以下の自主共同研究の実施、および神戸大学の研究者等が篠山市で実施する調査研究の支援を通じて、現場とともに社会実験を進め、他地域へ展開可能な地域課題の解決および地域のより良い発展に資する実践的な知の創造を目指した。

### <自主研究（計6テーマ）>

1. 中山間地域農業の資本生産性に関する研究  
衛藤彬史（学術研究員）、吉良有機農園
2. 複数集落の連携による地域資源管理に関する研究  
衛藤彬史（学術研究員）、草山地区
3. 規格外農産物に新たな価値の創出を目指した地域連携商品の開発  
板垣順平（学術研究員）、岡野ふるさとづくり協議会、丹波栗菓匠大福堂
4. 農産物の選別時における「経験知」とモノの相互交渉に関する研究  
板垣順平（学術研究員）、岡野ふるさとづくり協議会
5. 産学官による自然共生型産業の創出に向けた実践研究  
板垣順平（学術研究員）、内田圭介（学術研究員）、中塚雅也（農業農村経営学）
6. 篠山市における山林資源の循環活用  
内田圭介（学術研究員）、ササノワ LLC.、NPO 法人バイオマス丹波篠山

### <地域共同研究（計7テーマ）>

1. 人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発  
長野宇規（地域共生計画学）、篠山市農都政策課
2. 新しい株間除草機構を用いた水田での実験  
庄司浩一（生物生産機械工学）、真南条営農組合
3. 地域固有性の発現と農村発展モデルの確立  
中塚雅也（農業農村経営学）、大芋活性化委員会、福住地区まちづくり協議会
4. 駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究  
鈴木武志（土壌学）、篠山市農都環境課
5. 新しい特産品づくりに関する研究—“香りヤマナシ”栽培の可能性  
片山寛則（食資源教育研究センター）、真南条営農組合

6. 農村地域における小売業・生活関連サービス業を営む小規模企業者の事業承継に関する意識（卒業研究）

金城亜優（学部生）、中塚雅也（農業農村経営学）、篠山市商工会

7. 野生動物の環境化学物質への被曝量と環境影響（卒業研究）

杉田晁佑（学部生）・星信彦（動物分子形態学）・篠山市猟友会

## II 地域交流活動

フォーラム、研究会及び学習会等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し地域の発展に繋がる活動を実施している。また地域団体や地元高校との共同事業の実施や、活動スペースの提供等を通じ、地域に開かれた大学の交流拠点となることを目指している。

### 1. フォーラム・セミナー等の企画・開催

1) 第12回神戸大学・篠山市地域連携フォーラム（1/20）

場所：篠山市立四季の森生涯学習センター

2) 若手研究シンポジウム「地域×研究×実践」（12/9-10）

地域・研究・実践をキーワードに、領域、分野、地域を問わず、国内外の様々なフィールドで活躍する若手研究者14名を招集し、共有および議論をした。

3) 丹波地域大学連携フォーラム「地域貢献活動をより魅力的にするためには」

4) ラボ・オープントーク（計6回）

「起業・継業」「農村イノベーション」「里山資源活用」など、地域にとって重要と考えるトピックに沿って各回ゲストをお招きし、学びの共有、意見交換の場を持つことを目指した。

① 6/14「継業を考える夜」

② 7/30「コインが裏返った～負の遺産が魅力ある資産へ変わる、空き家・古民家の課題と魅力～」

③ 9/1「事業再生アイデア茶論～雇われないで生きたい人の事業リノベーション講座～」

④ 9/30「植本祭 みんなで育てるライブラリーラボにみんなの本棚を作ろう！」

⑤ 10/21「中国におけるアグリビジネスの実態と展望」

⑥ 11/30「ビジネスモデルを構築しよう - ビジネスモデル・キャンバスを活用して」

4) 農の学び場/Rural Learning Network（計7回）

① 第19回セミナー（8/5）「次代の農の在り方ー坂ノ途中の事例からー」



若手研究シンポジウムのようす



11/30 ラボ・オープントークのようす



第20回 Rural Learning Network のようす

- ②第20回セミナー（9／6）「中山間地の耕作放棄地を解消させる新たな挑戦ーマイハニーの事例からー」
- ③第21回セミナー（10／19）「農村民泊：これから民泊をはじめするには？」
- ④第22回セミナー（12／6）「つねよし百貨店の挑戦！持続可能な商店を地域で営むには？」
- ⑤第23回セミナー（1／17）「IT×里山の可能性：ITを地域の価値創造に活かすには？」
- ⑥第24回セミナー（2／3）「まちのPR：魅力のを見つけ方・伝え方とは？」
- ⑦第25回セミナー（3／17）「まちと住まいの将来設計：“理想の人生”からの考え方？」

## 2. 地域連携事業（連携先）

- 1) 森の学び舎（株式会社フェリシモ）
- 2) 赤プロ（真南条営農組合）
- 3) 無人駅イノベーション（JR 西日本）
- 4) 農村の民泊プロジェクト
- 5) ササヤマエキマルシェ（味間地区、後川地区ほか）
- 6) アンテナショップ開設プロジェクト（株式会社ワールド・ワン）
- 7) ササヤマナイトシアター
- 8) ラボライブラリー活用プロジェクト

## 3. 高校と連携した取組み

- 1) 農業体験を通じた高校生・大学生・地域住民の連携（篠山東雲高校）
- 2) 丹波木綿の普及と新しい織り機の開発を目指した高大連携（篠山鳳鳴高校）
- 3) 地産地消による商品開発実習（篠山産業高校）

# Ⅲ 人材育成

篠山市全体をフィールドに、生きた現場の課題を知り、現場での具体的な活動を通じた実践的な学びを目指すプログラムの実施を支援した。本年度は大きく3つ、大学生を対象にした地域密着型の体験学習プログラム「食農コープ教育プログラム」および地域人材を対象にした起業・継業創出支援プログラム「篠山イノベーターズスクール」の企画・運営支援、ならびに篠山市地域おこし協力隊のコーディネートを通じて実践型人材の育成を目指した。

## 1. 「食農コープ教育プログラム」の企画・運営支援

「食農コープ教育プログラム」では、篠山市の農家を訪れ、その指導のもとで農業農村を学ぶ「実践農学入門」と、その発展版として、具体的な地域課題解決のための実践を通じて学びを深める「実践農学」に取り組んでいる。実践農学において、本年度は5つの受入先でプロジェクトごとに取組んだ。

2017年度 テーマと受入団体

テーマ	受入団体	参加人数
在来種の茶の利活用	後川上の西生産組合	4名
地域の魅力発見マップづくり	大芋地区	3名
特産品メニュー開発	JA 丹波ささやま	3名
準・協力隊員活動	地域おこし協力隊	4名
森づくり	真南条地区ほか	14名

- 1) 「実践農学入門」西紀中地区（1年生担当）
- 2) 「実践農学」（2年生担当）

- ①在来種の茶の利活用（後川地区）、②地域の魅力発見マップづくり（大芋地区）、③森づくり（篠山の里山林）、④特産品メニュー開発（JA 丹波ささやま）、⑤準・協力隊員活動（篠山市地域おこし協力隊）

## 2. 篠山イノベーターズスクールの企画・運営支援

篠山市では2016年10月より、農村地域で新しい価値を見出し、ビジネスとして発展させることを目指す「篠山イノベーターズスクール」を開講している。本年度は、2期（2017年4月～）に林業、ツアー企画開業、商品開発、3期（2017年10月～）に多角的農業経営、ローカルメディアをテーマに実施しており、企画・運営や講師等として神戸大学教員が協力するかたちで総勢55名の新たなビジネス創出への挑戦を支援している。

## 3. 篠山市地域おこし協力隊のコーディネート

篠山市と神戸大学の連携協定に基づき、大学生が学業と地域での実践の両立を目指す「半学半域」を制度として導入することで、大学で得た専門知を地域での課題解決に活かし実践する人材の育成を目指している。

隊員の活動拠点である篠山フィールドステーションでは地域や市との調整役としてコーディネータを配置しており、日々隊員へのアドバイスや活動を進めやすい環境づくりに取り組んでいる。今年度は7名の隊員が市内各地で活動している。



農村イノベーションラボ



スクール2期生集合写真

## IV 広報活動

### 1. 各種講演

丹波地域大学連携フォーラム／丹波の森若者塾合同フォーラム／鳳鳴高校特別授業／丹波OB 大学特別講座／丹波県民局地域再生塾／里山スクール／TAMBA 地域づくり大学

### 2. 委員参加

丹波篠山ビデオ大賞実行委員／丹波地域大学連携フォーラム実行委員／篠山市国際姉妹都市委員

### 3. 情報発信

ホームページやフェイスブック等 SNS による情報発信に加え、篠山市の広報誌である「広報篠山」の1コーナーで毎月取組み内容を紹介している。

#### 2017年度運営体制

- センター長 : 星信彦 (応用動物学 教授)
- マネージャー : 中塚雅也 (食料環境経済学 准教授)
- 学術研究員 : 衛藤彬史、板垣順平、内田圭介、木原奈穂子
- 事務補佐員 : 林利栄子

# 平成29年度人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート活動報告

発達支援インスティテュートは、「心理教育相談室」「ヒューマン・コミュニティ創成研究センター」「サイエンスショップ」「教育連携推進室」「アクティブエイジング研究センター」の5つの組織で成り立っている。社会の多様な問題状況に応じて、人間発達に関する実践的な研究・教育を行うとともに、地域・外部団体との連携を進め、多層・多元的なコミュニティの創成に資することを目的とする。平成29年度、地域連携推進室とパートナーシップを持ちながら、以下の取組みを行った。

## 1. ESD ボランティアプラットフォーム支援事業（ヒューマン・コミュニティ創成センター）

地球規模の新しい社会・教育運動である ESD（Education for Sustainable Development）の世界的な地域推進拠点（RCE 兵庫－神戸）の事務局として、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが国連大学から認証されて11年が経過した。ESD の根幹的な特徴は、人・コミュニティ・システムづくりを一体化させながら徐々に持続不可能性の高い社会を変えていこうとするところにある。フォーマル・ノンフォーマルな教育の場でいかに ESD を組織化・顕在化させるかが実践的・研究的な課題となっている。地域コミュニティや外部組織との連携を築き上げながら、概ね三つの事業に取り組んだ。

三つとは、①人間発達環境学研究科および国際人間科学部との間で教育連携協定を結んでいる国立ハンセン病療養所邑久光明園をフィールドとする「ESD ボランティアぼらぼん」、②東日本大震災被災地の「赤崎地区公民館」（岩手県大船渡市）と連携して進められている「大船渡 ESD プロジェクト」、③ RCE 兵庫－神戸主催）の主催する ESD グローカルスタディツアープログラムの学生推進チームを育成・支援する「ESD 学び隊支援プロジェクト」である。これら三つのプロジェクトは、各プロジェクトの関係者（プロジェクトメンバー）・参加者（高校生・大学生：本学学生を含む）間のつながりを創成し、ESD 活動のプラットフォームを創成することをねらいとする。また、サイエンスショップやアクティブエイジング研究センターとの連携を生んでいく場となることも企図されている。以下、三つのプロジェクトの本年度の活動を報告する。



### ① ESD ボランティアぼらぼん～隔離・差別から解放への島づくり

100年以上にわたり隔離され人権を奪われてきたハンセン病患者の療養所「邑久光明園」をフィールドとして、「いのちの持続性（いのちの尊厳、いのちのつながりなど）」を大切にする社会づくりのためのボランティアプログラムを実施して11年になる。これまで同様、ワークキャンプ・交流活動・プロジェクト創成ワークショップなどの多様な教育・ボランティア活動を実施したが、加えて、現在、「長島愛生園」「大島青松園」も三園による「世界文化遺産登録」運動にも協力している。時系列で本年度の主な活動を整理すると、以下のようになる。

- ・春のスタートワークキャンプ（5月19日～21日）
- ・ウエルカムワークキャンプ（6月16日～18日）

- ・心の風景ジオラマづくりワークショップ（6月24日、7月1, 2日）
- ・福島避難家族わくわく保養ツアー支援（7月28～30日）
- ・邑久光明園納涼祭支援活動（8月2日～4日）
- ・夏のワークキャンプ（8月18日～24日）
- ・ESD 実践研究集会ポスター発表（9月23日）
- ・ゆるキャラグランプリ（於：三重）参加（11月18, 19日）
- ・ジオラマヒアリングプログラム（11月23日）
- ・冬プログラム（1月19日～21日）
- ・春創成合宿プログラム（3月17日～22日実施予定）



これらの教育・ボランティア企画の立案・実施を通して、社会人・学生・高校生などがESDの実践者として力量を高めただけでなく、兵庫大学・岡山理科大学などの学外の教員・学生、岡山県内の一般ボランティアとの横のつながりを深めることとなった。また、プロジェクトの本学の参加者は、全学部に及んでおり、「汎神戸大学企画」ということができる。夏の企画や冬プログラムでは、本学の『ESD 基礎A』『ESD ボランティア論』『ESD 論A/B』『ESD 生涯学習論A/B』の受講者を多数受け入れ、ESD フィールド教育研究にも協力した。

## ②大船渡 ESD プロジェクト 阪神淡路大震災と東日本大震災 ご縁を紡ぎ続ける活動

第一回東日本大震災支援ワークキャンプ（2011年4月29日～5月5日）から丸7年になる。HCセンターは、学生主導の「神戸大学大船渡支援ボランティア活動」（参加学生：34名）を一貫して支援し、距離の離れた地域間の連携を促進してきた。

今年度も、現地を訪問し、被災地のまちづくり組織である「赤崎復興隊」と連携してボランティア活動や交流活動が続けてきた。訪問回数は8回である。停滞期を迎えつつある被災地のまちづくりをいかに支援するのかを問い続けながら、阪神淡路大震災の被災者のおもいと現地のそれとをつなぐ役割を担っている。

現地での活動のほか、阪神淡路大震災の被災者からの募金（義援金・現地団体支援金）を「11えん募金」（毎月11日にJR六甲道駅前で開催）で受け取り、それを被災地に手渡すと同時に、阪神淡路大震災被災者の声や思いも被災地に伝える活動をしてきた。地域と大学・地域間のご縁を紡ぎ続ける地域連携活動である。また、参加学生は全学部にあたり、これもまた、汎神戸大学企画のひとつである。



## ③ ESD 学び隊支援プロジェクト 地域の活動ネットワークに魂を注ぐ母体づくり

本プロジェクトは、昨年度から本格実施されてきた「ESD グローカルスタディツアープログラム（通称：ESD スタディツアー）」を利用する人たちのコーディネートを担当する学生人材の育成を主眼とする。上記の二つのプロジェクトのメンバーのほかに神戸大学 ESD コースの学生たちが協力し合い、スタディツアーのコーディネートをする。学内外の RCE 兵庫-神戸のメンバーの支援を受けながら、ほぼ毎週ランチミーティングを実施するとともに、ツアー参加者と参加団体・活動の

間の連絡調整を行う。ぼらばん、大船渡のプロジェクトに参加することなどでコーディネート力を身に着けつつ、SNS を駆使した連絡調整能力を実地で鍛えていく。

ESD スタディプログラムそのものは、ESD に寄与するさまざまな地域団体・NPO・企業の企画するセミナー・シンポジウム・ボランティア活動やインターンシップの場を、高校生・大学生・一般の人たちが自由に行き来し、多様な「旅人（＝他の参加者）」と出会いながら、徐々に関係者のコミュニティが社会的な力になっていくことをねら



いとす。ツアーを自由に作成できるポータルサイトを活用し、今年度は、のべ1200名以上のユース（高校生・大学生）が本プログラムに参加した（昨年度1000名程度）。この事業推進のなかで、行政セクター（兵庫県・神戸市）、民間セクター（企業・NPO）との地域連携は、より深いものとなってきた。

そして、このプログラムを実質的に運営しているのが「ESD 学び隊」である。「旅人」がさまざまな活動や場面を行き来するためには、ピアサポーターとしてのナビゲーターの存在が求められる。その機能を十全に発揮するために、「ESD 学び隊」というコーディネート集団を組織化している。「ESD 学び隊」のメンバーは、自ら多様な活動に参加するとともに、SNS を使用して情報発信して参加者を募り、「旅人」の出会いを演出する。また、3か月に一度実施される「ESD カフェ」の企画・運営も担う。HC センターは、彼らの居場所を確保するだけでなく、関連企画プロデュース、ミーティング支援、コンサルテーションなどを行ってきた。

## その他の活動

以上の三つの事業だけではなく、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターでは、地域子育て支援や障害者の居場所づくり事業を行う「あーち」や、地域・市民のワークショップをブラッシュアップさせる「哲学カフェ」プロジェクトも進められている。また、今年度から「地域自然共生支援部門」「ヘルスプロモーション・健康行動支援部門」「社会保障・ソーシャルアクション実践支援部門」「国際開発実践支援部門」も設置され、さらに活動を充実させている。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 教授 松岡広路）

## 2. 兵庫県における科学を通じたコミュニティ・エンパワーメント（サイエンスショップ）

サイエンスショップは、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じた地域の課題解決や、市民を中心とした科学に関わる諸活動とそれらを通じたコミュニティ活性化への支援等、科学に関わるコミュニティ・エンパワーメントを理念として取組んでいる。平成29年度は地域連携事業として以下のような活動を行った。

### （1）千種川流域の市民による河川環境調査への協力

千種川は兵庫県西部に位置し、豊かな自然と生態系が保たれてきたが、近年、温暖化や大規模な河川改修等の生態系への影響が懸念されている。サイエンスショップは、平成25-26年度、環境DNA 分析手法等による「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の調査活動への協力を行なった。平成27年度以降は、市民を中心としたグループ「千種川圏域清流づくり委員会」により長期にわたっ

て継続されてきた河川環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」に、兵庫県立大学、総合地球環境学研究所（以下「地球研」）の研究者とともに河川水サンプルの化学分析、安定同位体分析などを通じて協力している。平成29年度は、神戸大学の研究者と学生が8月の一斉水温調査に参加・協力したほか、7月から9月には同地域の「ひょうご環境体験館」の特別展示に協力し、市民の活動と専門家の支援についてポスターと体験展示により紹介した。地球研および神戸大学での水サンプル分析結果については、12月に地球研で開催された同位体環境学シンポジウム、平成30年2月に兵庫県立人と自然の博物館で開催された、市民等の環境活動や自然研究の発表・交流を目的としたイベント「共生のひろば」等で報告された。平成30年度以降、地域のライオンズクラブなどの協力を得て、調査活動の意義や結果について、より幅広い地域の人々にフィードバックを行なってゆくことを計画している。



ひょうご環境体験館での千種川流域における市民の環境活動と専門家の支援に関する特別展示

## （2）兵庫県各地の市民グループ等による科学コミュニケーション活動等への支援

それぞれ伊丹市、姫路市等播磨地域、西宮市で、主体的に科学コミュニケーション活動に取り組む市民を中心としたグループ「サイエンスカフェ伊丹」、「サイエンスカフェはりま」、「サイエンスカフェにしのみや」によるサイエンスカフェの企画・開催に協力した（表）。また、平成29年12月には、南あわじ市において、湊漁業組合、湊里水利組合、兵庫県民局、コープこうべ、吉備国際大学などとともに、神戸大学でESDを学ぶ学生がため池の掻掘（かいぼり）に参加・協力する活動を支援した。この活動は、陸と海の物質循環と沿岸海域の生態系および漁業、外来生物の生態系への影響などについて地域の人々が認識を深め課題解決に取り組むことを支援する意味を持ち、神戸大学ESDコースと関連しながら継続的に行なわれている。



ESDを学ぶ学生の南あわじ市におけるため池の掻掘への協力

（サイエンスショップ室長 伊藤真之）

表 市民グループ等による開催を支援したサイエンスカフェの例

テーマ	開催日	（開催地）
＜サイエンスカフェ伊丹＞		
超高速計算！スパコンの活用と挑戦 ～スパコンで空気の流れがわかる！～	平成29年5月	（伊丹市）
太陽の謎に挑む ～最新の太陽観測からわかること～	平成29年5月	（伊丹市）
昆虫の時計とリズム	平成29年9月	（伊丹市）
和算を楽しむ	平成29年9月	（伊丹市）
ナメクジ 一道端に潜む不思議な生き物ー	平成29年11月	（伊丹市）
知らなくても楽しめる量子力学の話	平成29年12月	（伊丹市）
目の錯覚の心理学 日常は錯覚に満ちている	平成30年2月	（伊丹市）
＜サイエンスカフェはりま＞		
夏の南極の生き物	平成29年8月	（姫路市）
地震のメカニズムと災害	平成29年11月	（姫路市）
＜サイエンスカフェにしのみや＞		
宇宙を語ろう！ ～地球のような星と宇宙の生命～	平成29年7月	（西宮市）

## **第II章**

# **学内公募事業活動報告**

# 「映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携」

国際文化学研究科 准教授 板倉 史明

## 本事業の目的：

本事業は、平成25年度以降、神戸大学大学院国際文化学研究科と兵庫県唯一の映像メディア・アーカイブである神戸映画資料館（長田区）が連携し、映像メディア・アーカイブの映像および資料を活用することによって、神戸という地域に根ざした映像文化の育成と情報発信を行なうことを目的とする。今年が5年目となり、これまでの活用をまとめるとともに、本プロジェクトのさらなる展開の可能性を模索する。

## H29年度のプロジェクトの活動報告

### （1）第一回神戸発掘映画祭に協力——神戸の地域映像を発掘・紹介

代表者は第一回神戸発掘映画祭（11月23日から26日）の実行委員として参加し、戦前の神戸で撮影されたアマチュア映画の発掘と紹介に関わった（写真1）。この映画祭は主に神戸映画資料館が所蔵するフィルムの調査から、これまで知られていなかった映画作品を修復・上映するものである。代表者が関わったのは、「発掘されたアマチュア映画・ホームムービー」というプログラムであり、神戸で活躍したアマチュア映画作家・中島長一郎の作品の歴史的意義を解説したほか、1930年に開催された神戸商工会議所の「商工祭広告仮装行列」の映像や、同年の観艦式を記念して神戸で開催された「海港博覧会」の記録映像について解説した。

### （2）映画館研究のシンポジウムに参加 神戸映画館マップ

2017年11月12日（日）に神戸映画資料館において、地域の映画館と映画興行に関するシンポジウム「映画館研究の現状と将来—過去の映画館をどう論じるか—」が実施され、本事業が共催し、代表者は「神戸の映画館に関する研究の現状」というセッションを担当した（写真2）。ここではこれまで本事業において蓄積されてきた神戸映画史の成果の概要を紹介したあと、神戸映画保存ネットワークの田中晋平氏が「『神戸映画館マップ』の作成状況と課題」を、歴史資料ネットワークの吉原大志氏が「トーキー移行期の神戸新開地における映画館の労働と争議」について発表し、これまで解明されてこなかった神戸映画史を開拓することに成功した。

### （3）第18回宝塚映画祭に協力——兵庫映画史の開拓

2017年10月28日から11月3日まで宝塚市のシネ・ピピアで開催された第18回宝塚映画祭に協力した。宝塚には1938年から2013年にかけて映画やテレビ番組を制作した宝塚映画製作所（宝塚映像）が存在した。その歴史を顕彰する本映画祭では、今回「宝塚映画名作選——小林一三没後60年」というプログラムが生まれ、宝塚映画で制作された映画の上映会と、当時のスタッフに話を聞くトークショーも実施された。代表者が3つのトークショーで聞き手を担当し、当時の映画人たちの貴重な話を引き出し、兵庫県の映画史を振り返った。担当した作品は以下の3本：『小早川家の秋』（小津安二郎、1961）、『大菩薩峠』（岡本喜八、1966）、『恋すがた狐御殿』（中川信夫、1956）。

(4) 水島久光・原田健一編『手と足と眼と耳 地域と映像アーカイブをめぐる研究と実践』(学文社、2018年3月刊行)において地域連携活動の成果を公表

5年間の神戸大学と神戸映画資料館との連携活動を振り返り、本事業の成果と意義を自己分析する論文「地域ネットワークの集積拠点(ハブ)を構築する——アーカイブと大学の連携活動から」を執筆し、上記の書籍に収録された。

(5) シンポジウム「アーカイブの理論と実践——東映とその可能性を中心に」で本事業成果について講演

京都大学と東映が連携する「指定大学法人指定に伴う人文学系プロジェクト『映像メディア研究の国際的拠点づくりに向けて』」のプロジェクトのシンポジウムが2018年2月22日に京都大学で開催され、「映像アーカイブと大学の協働——神戸映画資料館と神戸大学の連携実践から」の題目で本事業成果について発表した。

(6) 今後の計画：年度末の研究会計画

本年度の本事業の成果報告として、2018年3月3日(土)に「公開研究会 映画から見る神戸とひょうご」を、翌3月4日(日)には「公開研究会 地域と映像アーカイブ」を神戸映画資料館で実施した。



写真1：2017年11月に神戸映画資料館で開催された第一回神戸発掘映画祭のポスター。代表者は神戸のアマチュア映画・ホームムービーに関するセッションを担当した。



写真2：代表者が参加したシンポジウムのチラシ(於：神戸映画資料館)

# 「神戸空襲を記録する会」戦災資料に関する学術的調査・ 整理および利用提言

国際文化学研究所 教授 長 志珠絵

## 1. 取り組みの概要目的

神戸空襲を記録する会は1971年発足した市民運動団体であり、「神戸空襲を記録する会」として発足した。聞き書とその出版、資料収集、市民向けの空襲記録展示、毎年3月17日での法要（薬仙寺）、適宜の市民向け講演会、フィールドワークなどを行ってきた。1990年代以降は、戦後生まれの代表・中田正子氏中心に市内小学校での空襲経験の語りを日常的に展開し、懸案であった空襲死者名簿を作成、2013年には刻名碑を大倉山公園に設置し、追悼祭を行った。この会は長年の活動期間を通じて戦災資料および戦後の平和市民運動資料と名付けられるべき資料を収集してきた。これらは従来、

→神戸市委託資料として保存、一部展示中（兵庫図書館）が、未整理である。このため、  
→資料整理を通じて目録化、アーカイブ化とともに、展示をリニューアルし、歴史資料・市民の平和教育研究活動のための文化資源として活用をめざすものである。

## 2. 準備作業

日時：2017/4/4～4/10 午前10時～午後6時

場所：相楽園会館講堂

- ① 神戸空襲を記録する会戦災資料について、兵庫図書館・神戸市中央図書館に委託保管管理分を一括に集める。（兵庫図書館の戦災コーナーでの展示資料除く。）
- ② 一括集中させることで、
  - a モノ資料（遺品や防災関連資料）
  - b 同時代の歴史的紙資料
  - c 記録する会が収集した戦後資料
  - d 記録する会が発信・収集した書籍・運動関係資料 ーの4区分を行った。
- ③ モノ資料については適宜、立命館大学平和ミュージアム、岡山戦災資料室から専門家を招請し、助言を得た。ほか、東京大空襲戦災資料センターの展示を見学、類似資料についても検討した。



相楽園会館講堂に集められた資料群

## 3. 取り組み作業

2に引き続き夏季での整理作業を行った。

日時：2017/8/7～8/9（追加作業日1）2017/8/25（追加作業日2）2017/10/3

場所：相楽園会館講堂

- 1) 雑誌・書籍類の整理および目録取り

- 2) 1970年代書類の整理および目録取り
- 3) パネル・写真の目録取り
- 4) データ入力・PDF化すべき資料の選定と同時並行でこれらの作業を行った
- 5) 1－4)の作業を受けて、劣化の激しい資料を取り分け保管

#### 4. 取り組み作業によって明らかになった点

##### 1) 神戸空襲を記録する会所蔵資料の1970年代運動資料としての充実

戦後の平和運動・市民運動が

- ・相互に連絡をとりあいミニコミ誌や冊子を交換していた点
- ・パネル作成を通じ、空襲展示を各地で積極的に展開し、神戸もその中心的な位置にあった点 —などが明らかになった。



##### 2) 戦時下での空襲関係資料の収集

同時代の日誌や記録、罹災証明書およびその関連史料など戦災被害を具体化する史料、神戸地区および兵庫県下での防空関係史料・冊子、戦後の米国爆撃 戦略調査団資料 —など神戸の空爆と市民生活を具体化する史料群の存在—など、一次資料も含め、歴史資料を多く所蔵収集していたことがわかった。これらは適宜、神戸市公文書館への移管が妥当と思われる。

#### 5. 今後の作業と進捗状況・成果

- 1) 準備作業および夏期作業には記録する会中心に、のべ20人規模の参加者があり、主に4人によってそれぞれ目録が作成された。これらの情報を統合し、目録作成を進め、年度内での冊子化をめざす。
- 2) 上記の目録作成作業の途上において、重要史料資料についてはPDF化を進めている。1の冊子にはこれらを含める。
- 3) 戦時下の日記について読本を作成中であり、これらも冊子に含める予定である。
- 4) 1－3の作業をより確実なものとするため、相楽園会館で保管中の資料群の再整理・再確認を2018. 2/20－2/23に開催予定である。
- 5) 書籍についてはすでに一部、神戸市中央図書館に寄贈したが、戦災文庫としての実現をめざし、目録化を進める。
- 6) 1－4の作業を通じ、「神戸空襲を記録する会」戦災資料群についての主に書籍・冊子類・戦災および戦後資料・戦後の平和運動資料の目録作成・刊行を行うための準備を進める予定である。

# 複数大学の連携による地域創生事業

## 「地域創生事業と教育・研究を有機的に結ぶ」

経済学研究科 教授 藤岡 秀英

### 2017年度活動概要

1. 「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」は、兵庫県多可町観音寺集落との連携を始めて8年となる。観音寺宮農組合の稲作、菜種栽培、蕎麦栽培と商品の販売促進など、多角的な連携が、「むらの秋祭り」「ログハウスカフェ」等、交流事業を土台に継続されている。
2. 学生サークル「木の家」には、神戸芸術工科大、関西学院大、神戸女子大、甲南女子大など他大学の学生も参加し、神戸大学の枠を超えた活動になってきたことは、この間の学生自身の取り組みの成果である。
3. 姫路市夢前町山之内地区において民間事業者「香寺ハーブガーデン」と山之内地域の住民による地域創生事業が展開されている。夢前町での事業について2回の事業参加と調査を実施し、経済学部学生・院生が調査研究に取り組んでいる。

これまでの研究成果をもとに、2017年9月、夢前町山之内地区でのシンポジウム「よもぎサミット」にて、藤岡が「逆流人口移動の3タイプと地域創生事業」をテーマに講演発表を行った。

【事業目標】この地域連携事業では、以下の5つの目標を掲げてきた。

1. 農業体験から6次産業化への体験実習
2. 地域住民との共同作業を通じたコミュニティ体験
3. 「6次産業化」と「地域創生事業」の研究活動
4. 複数大学が協力した地域創生事業の展開
5. 地元事業者との連携体制の確立

平成24年度から5年以上をかけて、本学の学生、参加大学の学生が共に「稲作実習」「炭焼き実習」「山林・河川での自然観察」「ASABANプロジェクト」での亜麻の栽培と収穫等に取り組んできた。

10月の観音寺集落の秋祭りは、学生、卒業生が企画・運営に携わり、集落全戸の住民が参加する、むらの行事として定着してきた。

神戸大学生協「レストランさくら」に試食用米を進呈しました。



「香寺ハーブガーデン 夢前町での地域創生事業に参加」

- (1) 5月 カモミール収穫イベントへの参加  
山之内地区の住民、香寺ハーブガーデンの顧客とハーブを収穫する。
- (2) 8月、経済学研究科、衣笠ゼミ生、藤岡ゼミ生ならび、甲南女子大佐伯教授による現地調査を実施。
- (3) 2017年9月18日「よもぎサミット」  
(夢前町山之内地区農家レストラン且緩々：しゃかんかん)にて講演。



- 2017年8月11日 「香寺ハーブガーデン」福岡譲一社長との連携により、神戸大学経済学研究科 衣笠ゼミと藤岡ゼミ、甲南女子大佐伯教授による現地調査を実施。
- 2018年1月、 藤岡ゼミの学部生3名は、ここでの調査をふまえた卒業論文を完成。
- 2018年2月23日 「夢前花街道事業」準備委員会の発足に向けて準備中
- 3月3日 「夢前花街道事業」調査を企画準備中

#### 【連携団体】

多可町観音寺集落役員会、「香寺ハーブガーデン」「NPO 法人大学連携・地域創生支援センター」  
「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」

#### 【成果と課題】

1. 地元事業者として、香寺ハーブガーデンとの連携は、新しいフィールドの開拓が実現し、また、これまで連携してきたASABANプロジェクト、さらに加古川コットンプロジェクト（靴下工業組）の連携事業では「新たな商品開発」が成功。
2. 「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」と「NPO法人・大学連携・地域創生支援センター」の相互連携も進んでいる。さらに来年度、他大学教員との連携内容も調査活動から複数の地域における学生の体験実習へと展開する。このなかで、今年度、他大学の学生参加が増えてきたことに大きな意味がある。
3. 学生の交通費（バスによる送迎費）の負担が大きいため「活動資金」の確保が優先課題となっている。
4. 平成30年度は、姫路市での「夢前花街道事業」がスタートする。そこでは産学連携、医学研究科と経済学研究科の連携を図ることができるかが大きな課題である。

# 高倉台団地再生・活用プロジェクト

工学研究科建築学専攻 教授 三輪 康一 助教 栗山 尚子

## 1. 事業の概要

現在、都市計画研究分野では、人口減少社会のなかで、コミュニティの持続的発展や縮退が今後の大きな課題として議論され、また国や自治体の都市政策としても、立地適正化計画の策定などが進められている。そうした都市全体の動向を見定め、これまでの方向性を見直すなかで、新市街地計画の計画的な位置づけや既存ニュータウンのエリアマネジメントが問題とされる。神戸市でも1960年代から住宅団地を開発してきたが、それら初期の開発団地は時間の経過とともに、居住者の高齢化や施設の老朽化などにより、次第に活力を失いつつある。一方、計画的につくられたこうしたニュータウンのインフラや上モノなどの資源を有効に活用することは、団地自身の活性化とともに、近隣地域や周辺への公的施設の運用にとっても極めて有用である。そこで神戸大学大学院工学研究科と一般財団法人神戸すまいまちづくり公社（以下公社）では、平成27年6月に「高経年住宅団地の再生支援に関する協定」を締結し、実質的な調査、計画作業を行ってきた。

平成27年度は、鶴甲団地の活性化（団地の再生、空き家住宅の活用の促進）を、平成28年度は、神戸市須磨区高倉台団地を対象として、団地再生を目的としたスモールアーバンスペース（小規模のオープンスペース）の調査と提案を行った。今年度は、引き続き高倉台団地にて、スモールアーバンスペースの活用による団地の魅力創出に向けた実践的な取り組みと、高経年住宅団地における空き家問題の事前的対策の立案に向けて、空き家の発生可能性に関する調査・分析を行った。

## 2. 高倉台団地（高経年住宅団地）の特性と課題

高倉台団地は、神戸市が、一団地の住宅施設の開発手法により1961年から1981年に開発・計画、事業を実施した計画人口12,000人、約3,000戸の住宅団地である。特徴は以下の通りである。

- ・「学校公園」を中心としたコミュニティ軸構想
- ・近隣センターを核とした歩行者ネットワーク
- ・道路段階構成と駐車場集中方式
- ・中高層、低層連棟、戸建など多様な住宅形式

こうした当初の計画理念、計画手法（近代都市計画の理念、方法論ともいえる。）がその後の成熟化の過程を経て現在どう活かされているかが問われている。

## 3. 団地の魅力創出に向けた取り組み

### 1) スモールアーバンスペースの調査と活用の提案

6月に、高倉台団地のスモールアーバンスペースの現地調査を行い、スペースの規模とその場所を使う人々の属性によって、スペースの活用策を提案した（表1）。

### 2) ワークショップによる住民からの意見収集

10月1日に高倉台中層住宅管理組合連絡協議会の皆様（15名）、10月28日に高倉台団地連合自治会の皆様（13名）に集まっていただき、スモールアーバンスペースの調査結果と活用提案を報告し、スペースの日常的な利用に関する情報収集（図1）と、今後

表1. 高倉台団地・スモールアーバンスペースの活用提案

ターゲット	子育て世代	高齢者	世代を問わない
空地の規模			
高倉台公園	キャンプ セグウェイ		DIY 流しそうめん
小規模 中規模 公園	アスレチック	健康器具	ピザ釜
各棟周りの 空地			ガーデニング 思い出ストック
道		散歩ルート 休憩できる場所	ストリートアート フェンスを彩る

のスペース活用についてのご意見を伺った。ベンチ・トイレ等の休めるところへの要望や、スペース活用の持続性に関するご意見（イベントが単発で終わらない、定例化できるシステムの必要性等）を伺えた。

### 3) スモールアーバンスペース活用提案の実践

ワークショップで食のイベントに

関する関心が高かったことから、11月12日に『秋の清掃・やきいもフェス』（主催：神戸大学建築・都市設計研究室，共催：高倉台団地連合自治会，協力：神戸すまいまちづくり公社・神戸市）を開催した。団地内の落ち葉を集めて、団地内の清掃を共同で行うことにより、連帯感や達成感を得た後に、焼き芋を焼いて食べ、会話をしながら、スモールアーバンスペースの活用提案に関する意見を収集するという企画である。50-60名もの居住者の方々と共に活動・交流することができた（図2）。

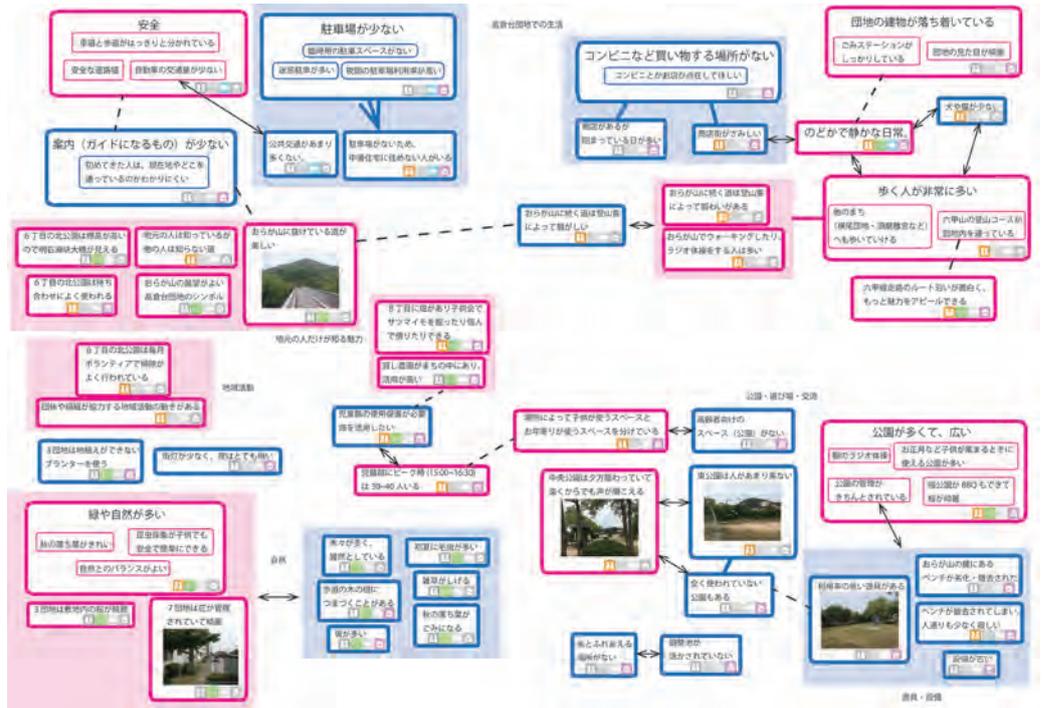


図1. 高倉台団地・スモールアーバンスペースの現状評価と課題



図2. 高倉台団地 秋の清掃・やきいもフェス

### 4. 団地における空き家の発生可能性に関する調査・分析

高倉台連合自治会，高倉台中層住宅管理組合連絡協議会，神戸すまいまちづくり公社，神戸市の協力を得て，高倉台団地の居住世帯（2,044世帯）に対して，空き家に関するアンケート調査を配布でき，948件の回答を得た（回収率46.4%）。

世帯主年齢は，70-79歳が最も割合が高い。住宅種類別では，タウンハウスの高齢者割合が一番高く，戸建て住宅，中層住宅の順に割合が低くなることから，タウンハウスが空き家化する可能性に注意を払う必要がある。また，所有する住宅の今後の意向に関しては，全体的には売却意向が多いが，わからないという回答も多く，その割合は高齢者世帯の方がやや大きい（図3）。

現在，空き家に関するアンケート調査について，詳細に分析中である。世帯主年齢と住宅の種類を中心として分析を進め，何年後に空き家の問題が顕在するかを推測し，空き家対策の立案を目指して検討を進めていく予定である。

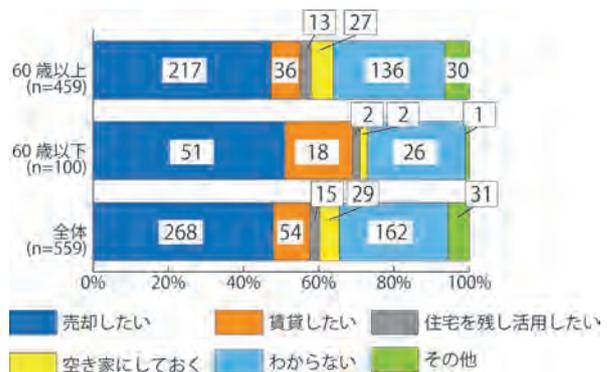


図3. 高倉台団地 所有住宅の今後の意向

# 被災地定点観測を通じた多世代災害語り継ぎと手法の開発

工学研究科 准教授 近藤民代

## ◆目的：

阪神・淡路大震災の被害および復興の過程を記録した動画および画像のコンテンツを蓄積して一元化すると同時に、アプリ開発による定点観測活動手法の開発を行い、震災の記憶を持たない多くの市民や子供たちが、神戸のまちを歩きながら阪神・淡路大震災を学習することができる方法論を確立させる。神戸市内で定点観測を実施する過程で、震災当時を経験・記録したシニア世代（神戸市広報課職員、復興まちづくりに係ったプランナーや専門家）が、震災の経験を神戸大学生に語り継ぎながら、さらに若い世代へと語り継いでいくことができる学習方法を定めることが最終的な目標である。

## ◆事業の概要：

阪神・淡路大震災から21年を経た被災市街地を対象として、神戸大学生、神戸市職員、人と防災未来センター、復興に携わった専門家らが連携して定点観測活動を実施して震災復興の記録とそれを通じた多世代災害語り継ぎ手法を開発する。具体的な活動は次の通りである。

1. 阪神・淡路大震災の被災市街地を記録した動画および画像の位置の特定を行う。
2. 震災から23年を経た神戸のまちで多世代による定点観測を実施し、震災復興アーカイブの新たなコンテンツを作る。
3. 人と防災未来センターが著作権を有している災害記録・伝承支援アプリを活用しながら、定点観測を重ね、アプリの改良を行う。

## ◆事業の参画者：

- ・人と防災未来センター研究部  
研究主幹 宇田川真之氏（災害記録・伝承支援アプリの開発者）  
上級研究員 小林郁雄氏（震災復興まちづくりに係ったプランナー）
- ・神戸市企画調整局情報化推進部情報化推進部担当  
松崎太亮課長（震災直後の被災市街地を動画で記録した当時の神戸市広報課職員）
- ・（一財）神戸すまいまちづくり公社・まちづくり会館
- ・神戸大学附属図書館震災文庫
- ・神戸大学大学院工学研究科建築学専攻・近藤民代研究室

## ◆平成29年度事業実施内容：

1. 2018年2月9日 神戸市長田区におけるアプリを活用したまち歩き with 平成28年熊本地震の被災者  
平成28年熊本地震の被災地益城町において災害語り部活動を実施している関係者を神戸に招聘し、

神戸市長田区においてアプリを活用したまち歩きを実施し、多世代の災害語り継ぎ手法に関して意見交換を行った。熊本地震からまだ2年も経過していない中で、益城町ではすでに震災アーカイブに関する取組が行われており、そのかたちについて議論を行った。

## 2. 2018年2月10日 神戸大学都市安全研究センターオープンゼミでの発表と議論

神戸大学都市安全研究センターオープンゼミにて「定点観測活動による震災復興アーカイブづくりー神戸と大槌の活動からー」という題目で発表を行った。阪神・淡路大震災と東日本大震災の被災地で若い世代や多くの関係者と共に定点観測活動を行っている。目的を、震災を学習し語り継いでいくこと、復興に主体的に参加する動機づけとすること、震災復興アーカイブを作ること等と説明し、神戸での震災タイムスリップウォーク、大槌高校復興研究会との定点観測活動について報告を行った。定点観測活動はこれらの目的を達成できる有効な手段なのか、課題は何かについて出席者と議論を行った。



アプリを活用したまち歩き

## 3. 2018年2月26日 定点観測写真に加えるキャプションづくりに関する意見交換

東日本大震災の被災地仙台で定点観測に取り組む3.11オモイデアーカイブ代表を訪ね、阪神・淡路大震災のタイムスリップウォークや定点観測による震災復興アーカイブや展示物の作成手法について議論を行った。震災当時の動画や写真を集約し、アプリによって一元化することは進められているが、ユースが阪神・淡路大震災23年を経て撮影した写真を加えるのと合わせて、どのようなテキストを埋め込むかについて十分に検討されていないことが課題であった。展示物には撮影された風景だけでなく、それを撮影者や伝承者が伝えたいことをテキストとして追加することが不可欠である。3.11オモイデアーカイブ関係者にテキストを引き出して付与する手法について聞き取りを行うことによって、以下のような知見や結論を得た。



定点観測記録のキャプション付けに関する意見交換

- ① 写真にキャプションを付与する作業は、写真（その風景）に対する解釈を強く誘導する危険性があるため、慎重に行う必要がある。無理に急いでやることはない。
- ② 写真にキャプションを付与するプロセスとしては、定点観測展示会を開催し、シニアとユースがともに見ながら行うことが効果的ではないか。復興の風景の背後にある生活再建や復興過程を説明するキャプション付けの過程は、そのプロセスを自分事としてもらうためにも重要だ。
- ③ 阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災地で行っている定点観測活動チームと連携し、継続的に定点観測による語り継ぎ手法について議論を行っていくことで合意した。被災地域の連携によって、阪神・淡路大震災の被災地ひょうごにおける震災の語り継ぎを深化・発展していくことに取り組んでいく予定である。

# 子どものためのコンサートの企画制作を通して 地域の音楽家と地域の子どもたちを結ぶ

## 子どものためのコンサート第10弾「ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロが 奏でる はじめましてのカルテット」

神戸大アートマネジメント研究会

国際文化学研究所博士課程前期課程2年 岩野 ちあき

### 1. はじめに 概要と活動の意義

神戸大アートマネジメント研究会は、芸術文化に関するマネジメント及び政策の研究を行い、大学の知的・文化的資源を活用して、芸術文化に関わる地域活動の発展、及び市民的・文化的公共圏の形成に資すること、さらに芸術文化による国際交流・協力、及び異文化理解の促進を目的として2006年に発足した。神戸大学国際文化学部の学生らをはじめ、アートマネジメントに興味を持つ学生が、大学・地域と連携して芸術と生活をより身近に結びつけるための様々な活動を行っている。

研究会における活動の中核を担うのが「子どものためのコンサート」シリーズである。毎年、神戸市内で開催されている〈神戸国際芸術祭〉における教育普及活動の一環として始まり、今年で10年目を迎える。「子どものためのコンサート」では、子どもが音楽を通じて感性や創造性を育む機会を提供することを目指し、毎年学生の議論の末にテーマ設定がなされる。

企画の実現に向けての大きな特徴は、学生が成し遂げたいコンサート像をもとにアーティストと議論を重ねること、出演者とのやり取り・広報・当日の運営まで、企画のすべてを学生が担うことである。これまでも、ヴァイオリン、チェロ、ピアノや声楽、朗読とのコラボレーションなど多彩な企画を考案し、定型的なコンサートの内容とは一線を画したユニークな公演を行ってきた。

この活動を通して、音楽は決して受動的に鑑賞するためのものではないこと、音楽や演奏家と対話をすることで、様々な感情を発見する楽しさがあるということを次の世代に伝えるとともに、音楽への関心を開き、継続的な鑑賞習慣を形成することで文化的な素養を育む一端を担うことを目標としている。

### 2. 活動報告

今年度は、小学生を対象とした弦楽四重奏によるクラシックコンサートを開催した。演奏は、神戸市室内合奏団の団員の方に依頼し、曲目構成、台本は学生が主体となって制作した。

#### ■公演概要

公演名：子どものためのコンサート第10弾  
「ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロが  
奏でるはじめましてのカルテット」

日時・場所：2017年11月19日（日）

13：30開場、14：00開演

シーサイドホテル舞子ビラ神戸 あじさいホール

出演者：神戸市室内合奏団よりヴァイオリン：萩原合歓、前川友紀

ヴィオラ：中島悦子 チェロ：山本彩子

入場料：小学生無料、中学生以上500円

主催：神戸大アートマネジメント研究会 共催：神戸市民文化振興財団

神戸大学国際文化学部 国際文化学研究所 博士課程前期課程2年 岩野 ちあき  
子どものためのコンサート第10弾

「子どもが音楽を通じて感性や創造性を育む機会を提供することを目指し、毎年学生の議論の末にテーマ設定がなされる。」

出演者：神戸市室内合奏団より  
ヴァイオリン：萩原合歓、前川友紀  
ヴィオラ：中島悦子  
チェロ：山本彩子

2017 11.19  
開場 13:30  
開演 14:00

お問い合わせ先  
神戸市室内合奏団 企画・演出：岩野 ちあき  
〒270-0292 神戸市東灘区舞子1-1-1 舞子ビラ神戸 あじさいホール  
TEL: 078-521-1111

## ■コンセプト～本番の準備

「はじめてクラシック音楽に触れる子どもたちには“なんだか楽しそうと思える世界”、音楽に親しみのある子どもたちには“新しく知る世界”を届けたい」「地域で活躍する音楽家を市民に紹介したい」という2点をコンセプトとした。その背景には、数多く開催される子どものためのコンサートの中でも「小学生対象」の公演が少ないこと、オーケストラ等と比べて「室内楽」を生で聴く機会が少ない現状があげられる。そこで、子どもたちが普段耳にすることの少ない室内楽の響きを、解説や体験を交えながら味わうことで、音楽表現の多様さ・楽しみを感じられる企画を提案した。演奏曲目は、演奏して欲しい曲のイメージを学生からアーティストに提案し、アーティスト側からは、楽器体験のノウハウを教えていただいた。また、チラシの作成から小学校への広報活動、プログラム解説やホールとの打ち合わせなどはすべて学生が行った。

## ■コンサート当日

本番は学生による司会進行で、曲目の中に楽器の奏法紹介や、演奏家への質問、インタビューを交えながら、子どもたちに様々な角度から音楽の魅力を伝えることができた。さらに、楽器体験コーナーでは抽選に選ばれた5人の子どもたちが、学生の補助のもとで演奏者と「共演」するなど、多彩な内容を盛り込んだ公演となった。



## ■公演の成果

9月下旬の広報開始直後から申し込みが殺到し、チラシ配布後の1週間で100名を超える参加申し込みがあった。また、11月上旬に定員を超える申し込みとなり、音楽鑑賞に対する関心の高さがうかがえる。さらに、参加者の64%が小学校低学年の児童であり、多くの子どもたちが初めて生の弦楽四重奏を聴く機会であったと推察される。

子ども向けのアンケートでは、コンサートに来たいかどうかという項目で、92%の子どもがまた来たいと回答しているほか、自由記述欄ではコンサートで得られた感想や驚き、発見を一生懸命表現するものが多く見られた。(以下抜粋)

★最初に、「皇帝」を聞いた瞬間、ビビッときました。また聞きたいです。

★はくりょくがあって、ずっと口を開いたまま聞いていた曲もあった。

★いつもお母さんがCDで曲をかけているけど、じっさいに聞くとぜんぜんちがいました。

また、保護者からも「音楽は好きですが、バイオリンなどは日常的に無縁なので新鮮で楽しめます。」「美しく、涙が出そうでした。」「大人も勉強になりました。生演奏は心を豊かにしてくれますね。」という声があった。普段クラシックに触れることの少ない人から音楽好きな人まで、幅広い参加者それぞれに新たな発見や感動を与えるものだったと考えられる。

## 3. おわりに

今回の事業を通して、生の音楽を聴く経験が子どもたちの感受性に大きく働きかけ、素直な感性を育むことができると確信を持った。出演者からは、学生が企画するからこそ一般のコンサートと違う切り口からその魅力を伝えられるのではないかという評価もいただくことができた。これからも、子どもたちが気軽に音楽に親しめる機会を創り上げると同時に、なぜ芸術が生活に必要とされるのか、その根本に迫りながら研究会の活動を展開したいと考える。

# 神戸市における里山資源利用法の世代を超えた普及と継承

神戸学生森林整備隊「こだま」 野口結子

## 【はじめに】

日本の森林面積の多くは人工林や里山林など、人による管理が必要な森林である。森林は酸素の供給と二酸化炭素の吸収、水資源の涵養、レクリエーションなど様々な恩恵を私たちにもたらしている。一方、その持続的な管理には多大な費用と労力が必要であるため、日本では管理放棄、または管理不十分な森林が増加している。このような問題を解決するため、全国のボランティア団体やNPOが森林整備活動を行っている。しかし活動者の高齢化や若手不足、誤った管理手法の選択等により、地域団体による適切で持続的な森林整備活動については課題が多く残っている。さらに、若い世代が里山林を利用する機会が減り、里山資源の伝統的な利用法が伝承されにくくなっている。神戸学生森林整備隊（以下「森林整備隊」）は、森林科学の専門知識を学んだ学生ボランティアが、科学的データに基づく森林管理を行うとともに、大学を母体とすることによりボランティア活動を持続させることを目的として、平成25年度に発足した。本年度の森林整備隊はキーナの森の開園に向けた森林整備活動を適切に行うこと、また学生の立場から里山資源の利用法や森林における活動経験を異なる世代に普及することを目的として活動した。

森林整備隊の主な活動場所は平成29年度7月に開園した神戸市営の森林公園「キーナの森」である。隣接する「あいな里山公園（国営明石海峡公園神戸地区）」および神戸市営「しあわせの村」と合わせると、神戸市内で最大級の面積を持つ連続した緑地になる。キーナの森では開園後も園内にある耕作放棄地や放置里山林の整備が進められている。

補足：キーナの森について

「キーナの森」は、隣接する「あいな里山公園（国営明石海峡公園神戸地区）」とともに神戸市における「生物多様性保全のシンボル拠点」として整備してきた公園です。放置された里山に手を入れることで、希少種の保護を含めた豊かな生物多様性の保全・育成を行うとともに、環境学習や市民活動の拠点としての活用を目指しています。

神戸市 建設局 公園部 整備課 HPより

<http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/park/intoro/ki-nanomori.html>（参照2018－1－19）

## 【活動報告】

### ・小学生との森林総合学習

神戸市立ひよどり台小学校3年生向けの授業で、ひよどりごえ森林公園にて自然環境教育を行った。森林整備隊員はグループに分かれた小学生を引率し、レジュメに書かれた葉の特徴を手がかりに小学生が自ら樹木を探して観察する補助をした。また、小学生から挙がった疑問に対して現物を用いて説明し、植物観察方法の基礎を教えた。子供たちは葉の形態や色の違い、葉のつき方を手に取って観察し、自分の手でスケッチやメモに記録することで種の違いを理解しようとしていた。この総合学習を通して、森林における樹種の多様性に関する知識を普及できた。



森林総合学習の様子 採ってきた葉を触って形や質感を比べ合う

・あいな里山公園における草木染体験イベントの企画運営

キーナの森と隣接するあいな里山公園の依頼を受け、昨年度から整備隊が学んでいる草木染の技術を広めるイベント「引き出そう！里山のいろどり」を企画・運営した。一般者向けの募集で、子供から大人まで20人弱の参加者が集まった。里山における身近な植物（クサギ・コブナグサ・アカメガシワ・ヤマモモ・ヌルデ）を用いてハンカチを染め、幅広い年齢層の参加者と里山資源の楽しい使い方を共有できた。さらに、キブシの枝遊びや実物の葉を使ったお絵かき、ヤマモモの樹皮剥ぎなどの体験コーナーを同時開催し、里山資源の楽しみ方や採取の方法についても普及を行った。



写真左から：草木染めの様子、イベント参加者が作ったハンカチ、利用した植物の例

・「キーナの森」開園式の運営協力

本年度7月8日の開園式に向け、会場ディスプレイの考案・キーナの森の植物展示の準備に協力した。準備では様々な樹種の枝や花、木材を森から調達し、ディスプレイを通してキーナの森を代表する植物の魅力を来園者に紹介した。また開園に伴いキーナの森の看板を作成した。開園式当日は草木染体験コーナーを開催したり、キーナの森の生き物紹介ツアーで親子連れに森を案内するなど、里山資源についての知識や経験を普及した。開園式後には参加した他団体と昼食づくりや活動紹介を通して交流を行った。

・定例活動「もりかつ」への参加

毎月第2土曜日に行われるキーナの森の整備活動「もりかつ」に参加し、人が入るには整備が不十分なエリアや、継続的に草刈りなどの管理が必要なエリアで整備活動を行った。森林内の園路周辺の草刈りや階段づくり、園路沿いに生える「不思議な形のコナラ」周辺の整備などを行い、人が快適に過ごせるよう整備した。また生物多様性の保全のシンボル拠点として生き物観察ができるよう、園路沿いの池の近くに野鳥の水浴び場と観察場所を整備している。



写真左から：完成した看板、開園式の様子、開園式後の他団体との交流

【おわりに】

今年度はキーナの森だけでなく、あいな里山公園や小学校において幅広い世代の人たちと共に里山資源に関する知識と経験を共有できた。今後も、私たちがキーナの森で実践的に学んだ森林整備や里山資源の有効利用法を、学生という立場から他の世代へ普及・継承していきたい。

# 地域と世界をつなぎ、篠山の魅力を世界へ

AGLOC 農学部 3 回生 阿部 大樹

## 1. はじめに

神戸大学国際農業サークル「AGLOC」は平成27年度農学部開講講義「実践農学入門」でお世話になった「兵庫県篠山市岡野地区」において設立された団体です。

AGLOC は、まだ見出されていない地域の魅力を世界に伝えたい。地域と世界を結びつけ、日本の農林水産業に活力を与えたい。このような思いをもって、「地域と世界を繋ぐ」という理念のもと、仲間である留学生と共に、拠点である兵庫県篠山市で活動してきました。また「AGLOC」は、Agricultural、Global、Local、Okano district、Circle の5つの英単語の頭文字で、これには地域、農業、世界を一つの輪で繋ぐんだという強い意志が込められています。

活動開始から約2年経った現在において、留学生6名を含む40名が所属しています。

## 2. 活動報告

### ①地域から世界に

地域から世界への活動の一例として、海外農業視察を行っており、本年度はベトナムの有機農家さんと、留学生メンバーの故郷である台湾の農家さんを訪れました。

異国の地で、農家さんと語り、共に汗を流し得た知識や経験は、日本と各国の農業の違いを認識するきっかけとなっており、私たちの「地域と世界を繋ぐ」活動の原動力となっています。

また、留学生の意見や、世界各地の食べ歩き体験を元に、地域の特産品である、「ヤマノイモ」を使った洋菓子「Chokobe」や、ヤマノイモパンケーキを開発しました。Chokobeに関しては昨年、篠山市の地域団体が、台湾のフードフェスタに商品提供を行い、ヤマノイモパンケーキに関しては、開発後、地域の祭り等で継続的に販売されるなどの成果をあげました。このように、地域から世界に出て、海外からの視点を取り入れながら、商品開発を行っています。

### ②世界から地域に

留学生に篠山を知ってもらい、AGLOCの活動に興味をもってもらうため、新規留学生向けに地区の宿泊施設で、黒枝豆の収穫体験や、BBQなどを日本人メンバーと行う Welcome Camp を行っています。また、地域の人々にも留学生との交流を深めてもらうため、活動地区の小学生や保護者の方をお呼びして、留学生の出身国の文化を紹介するイベントも行っています。



(図1) 台湾の農家さんにて



(図2) ヤマノイモパンケーキ



(図3) Welcome Camp

さらに、まだ知られていない地域の魅力を世界の人々に体験してもらうため、観光プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、ガイドマッチングアプリを運営する会社さんと連携しています。篠山へ、外国人観光客を呼び込むことを最終目的としており、現在は、京都でガイドの経験を積んでいます。12月には、篠山特有の魅力を活かした、英語版の観光プランをおよそ40人の留学生に提供し、ガイド活動を行いました。



(図4) 篠山観光—留学生のガイド

### ③地域と世界、双方向に繋ぐ

私たちの活動の軸として、月に一度、農業ボランティアを留学生と共に行っています。これまで接点のなかった留学生と農家さん。お互いの文化に触れることができる、この活動を心待ちにしてくれています。この農業ボランティアは、留学生の心を篠山に惹きつけ、彼らのSNSアカウントから、AGLOC、さらに篠山の魅力を自国に向けて発信してくれています。



(図5) 農業ボランティア

また、この活動の中で、篠山の魅力を発見した留学生メンバーが、日本人メンバーと力を合わせ篠山のPR動画を作成しました。彼女も農業ボランティアから篠山に通うようになり、AGLOCに加わった留学生の一人です。彼女は、より多くの人に地域の魅力を伝えたいという強い思いから、タイ語、英語、日本語を用いた動画を、日本人メンバーと協力して作り上げました。この動画は、地域の「丹波篠山ビデオ大賞」にノミネートされ、地元からも高い評価を得ています。



(図6) AGVLOG- 地域紹介動画の作成

### 3. 最後に

昨今、我が国の農業は、担い手の高齢化、食産業関連市場の伸び悩み、など様々な問題を抱えています。その中で、農村部にインバウンド需要を呼び込む事や、高品質な日本の農産物を輸出する事は、この国の農業の光となります。そのような活動を進める際に、地域のことを知り、地域を愛してくれている留学生の存在は、大きなものとなるでしょう。しかしながら私たちの活動の原点は本質的にはそこにはないのです。「AGLOC」の活動の原点は、一人のアメリカ人留学生が「私も農村部で活動してみたい」と言ってくれた事でした。その一言から留学生との農業ボランティアが始まり、現在では多くのプロジェクトを行うに至っています。留学生に、私たちの愛する篠山を知ってもらいたい。この気持ちを持っていたからこそ、多くの地域の方に活動の支援を賜り、今まで活動を進めていくことができました。今後もこの初心を忘れず、「地域と世界を繋ぐ」という理念の元、活動していければと思っています。

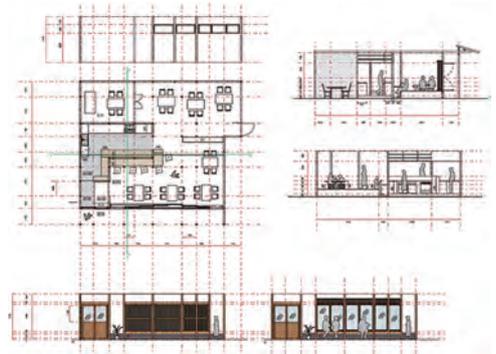
# プロジェクト福良 学生地域アクションプラン 活動報告

プロジェクト福良 山田千彬

## 1、はじめに

現在の日本において空き家問題は深刻である。全国の空き家戸数は増加の一途をたどっており、この先も増加し続けることが予想される。この傾向は兵庫県南あわじ市福良でも見られ、少子高齢化も進んでいるため、かつての商店街は昔の活気を失ってしまっている。対照的に、うずしおや淡路人形座、様々な特産品という豊富な観光資源に恵まれているため、町の中心は観光客が数多く訪れている。

そこで私たちは、学生という立場から地域住民の声や観光客のニーズを拾い上げ、古民家の改修を行うことで住民の集いの場、観光客が足を運ぶ場を作り出し、かつての商店街の中で連続的に改修を続けていくことで観光地の集中化を解消し、福良の町全体に再び活気を吹き込むことを目標として活動を続けている。



▲改修図面

## 2、活動報告

私たちは、今年度の具体的な活動としてNPO法人 淡路國プロジェクトと連携して福良下町商店街にある古民家の改修を開始した。今年度初めに行った2回の現地調査により地域住民・観光客から拾い上げた声を自分たちで読み解き、改修計画へと反映させている。改修中の古民家は下町商店街の入り口に当たる場所にあり、改修後は飲食店として生まれ変わり新規事業者を募集し、淡路國プロジェクトによって開業支援が行われる予定となっている。今年度私たちが行った改修の様子を以下のように記す。

### ○天井、内壁の解体（8月合宿）

改修計画を決めた後、まずは解体工事に取り掛かった。改修後不要となる部分の壁や、天井の仕上げ材を取り壊し、建物の中に柱が立っているだけの空っぽの状態となった。作業を真夏に行ったため炎天下の中でかなり過酷な作業であったが、こまめに休憩を挟みながら、1週間の合宿中解体を続けた。壁をなくしたことで建物の内部がかなり広く感じるようになった。



### ○コンクリート打設、外壁の解体（9月合宿）

今回の合宿より、福良に事務所を持つ長浜工務店さんに支援をしてもらい、私たちでは困難な部分の施工と技術的な面でのアドバイスをいただいている。コンクリートは、新しくキッチンになる予定の部分に打設した。外壁は、少しセットバックした位置に新しい外壁を作るため、元の外壁を取り壊した。道路に面する部分に空間ができ、通りかかる人を建物へと引き込むための工夫である。



### ○外壁の塗装（10・11月合宿）

新しく貼った外壁の下地に、珪藻土を塗って仕上げをする作業を行った。珪藻土を練るところからコテで塗るまで全てをやったのだが、全員が素人のため、初めはなかなか上手くいかなかった。

しかし、終盤には作業に慣れ始め、よく見ると拙い部分が残ってはいるが、明るい雰囲気の外壁が出来上がり始め、一気に建物の見た目に変化していくのを感じた。珪藻土を塗り始めてからは、外から見てかなり変化がわかるようになり、前面の道路を通りかかる地元の方や観光客の方に声をかけてもらえるようになり、私たちの活動を気にかけてくださる方が増えたように感じた。



#### ○外壁部の床下処理（11・12月合宿）

10月合宿で塗り残した部分の珪藻土を塗り終え、外壁の塗装が完了した。次に取り掛かったのが、外壁部分の地面と床との間の部分の処理である。その部分の材料として今回採用したのが瓦である。淡路瓦は古くから作られている淡路島の伝統産業で、栄和瓦産業株式会社さんの協力を得て、生産の過程でどうしても出てしまう少し歪んでしまった黒燻瓦を譲ってもらい、外壁に使った。淡路島の素材を使用することで、古くからある商店街に溶け込むだけでなく、淡路島の現地産業の推進と魅力の発信を行うことを意図した。



#### ○カウンター・垂れ壁の作成（12・1月合宿）

外壁がほとんど完成したため、いよいよ建物の内装工事に着手した。まずは、キッチン部分のカウンターと垂れ壁の施工から始めた。あらかじめ枠を作成し、それを柱の間にはめ込むことでカウンターや垂れ壁の構造とし、その枠の上から板を張ることで形を完成させる。一つ一つ柱のスペンが異なるため、枠をはめ込むのにかなり苦労したが、のみやヤスリで微調整をして進めていった。



#### ○カウンター席の座席足元部分の処理（1月合宿）

カウンター部分の客席となる箇所足の足を入れる掘り込みを作成した。地面を少し掘り、その上にコンクリートブロックを置いて水平面を作る。それを基準として板を貼り、掘りごたつ型の客席の足元部分とした。

私たちが福良を訪れる理由は、古民家の改修を行うためだけではない。ハード面として古民家を改修して住民や観光客のベースとなるような居場所の作成を行なっているが、ソフト面として少子高齢化によって年々参加者が減っている福良の数多くあるお祭りに積極的に参加している。地元の者ではない私たちであるが、福良の方々と一緒にお祭りに参加することでコミュニケーションを取る機会を得ることができ、私たちの活動を気にかけてくださる方が増えた。町とプロジェクトをつなぐために福良の町の伝統であるお祭りに参加することはとても重要なことだと感じている。



### 3、おわりに

今年度は古民家の改修計画の設計から実際に施工を開始させ、ハード面の進展が大きかった1年であった。しかし、私たちの目標である福良に活気を取り戻すという意味ではただ古民家の改修を行うだけでは不十分だと感じた。古民家の改修が完了した後の利用のされ方といったことも含め、継続的に関わっていくことが大切だと思う。福良の方々と私たちとの関係性を広げていきながら、これからも活動を続けていきたいと考える。

# 「母子にやさしい街づくり」活動報告

母子健康応援プロジェクト 保健学研究科 松田直佳

[はじめに]

現代の日本では少子化が問題となっており、理想の子ども数を持たない理由について母親自身の心身機能面の理由が挙げられている。国・市町村の公費による健診対象は産後1か月を最後に、母親から子どもへと移行するため、産後は母親の健康を把握しづらい時期であり、母親自身の健康への関心が薄れてしまっているのが現状である。

そこで我々は、保健学の立場から「母子にやさしい街づくり」を目指し、2016年度に母子健康応援プロジェクトを発足した。発足時より健康チェックを行い、腰痛・骨盤帯痛や骨密度低下、抑うつ症状などの健康問題を抱えている母親が一定割合含まれていることを明らかとした。さらに、腰痛・骨盤帯痛に関しては産後10か月においても約半数の母親が抱えている実態を受け、腰痛の予防・改善を目的とした腰痛予防教室を平成29年9月より開催することとした。

[篠山市乳幼児健診での活動]

篠山市丹南健康福祉センターの保健師の協力のもと、乳幼児健診（4ヶ月児健診・乳児健康相談）を受診した母親を対象とし、健康チェックおよびその結果のフィードバックを行った。4ヶ月児健診でのチェックは2016年2月より、乳児健康相談でのチェックは2016年8月より行っている。毎月行われる健診において、受診した母親のうちの約7割が健康チェックに参加しており、その総数は2017年12月時点で4ヶ月児健診時385名、乳児健康相談時232名となっている。以下に健康チェックの詳細を報告する。

## ■腰痛・骨盤帯痛

腰痛・骨盤帯痛の有症率は妊娠中で約85%、産後4ヶ月時で約50%、産後10か月時で約45%であった。痛みの部位に関しては、妊娠中は腰部が約50%、骨盤・恥骨部が約25%であり、恥骨部痛が一定割合含まれるのに比べ、産後4ヶ月・10か月は腰部が約60%、骨盤部が約30%、恥骨部は10%以下で腰痛・骨盤帯痛が主な疼痛部位であった。

## ■骨密度

超音波による簡便な測定機器を用いて測定し、%YAMという骨密度指標を用いて判定した。産後4ヶ月時では約15%、産後10ヶ月時では約8%の母親が骨量減少傾向を示した。また、産後4ヶ月時点で骨量減少傾向を示した母親の約75%は完全母乳であった。

## ■抑うつ症状

アンケートを用いた簡便な調査により、産後4ヶ月・10ヶ月時において約10%の母親が抑うつ症状を示した。

## ■尿漏れ

尿漏れの有症率は妊娠中で約50%、産後4ヶ月時で約20%、産後10ヶ月時で約15%であった。

## ■フィードバック

上記の結果と姿勢や子育て動作に関するコラムをフィードバックとして後日郵送した。健康



チェックの結果を、今後の保健指導に活かしてもらえよう、参加者本人だけでなく保健師にもフィードバックを行っている。

### [腰痛予防教室]

産前産後の腰痛・骨盤帯痛は妊娠に伴う「しかたのない」症状とされるが、我々の調査では産後10か月においても約半数の母親が腰痛・骨盤帯痛を有しており、慢性化が伺われた。妊娠・出産に伴う姿勢の変化や筋への負荷などにより腰痛・骨盤帯痛が誘発されるのみならず、育児動作も腰部に負担がかかるものが多く、正しい知識が必要であると考えられる。そこで腰痛予防教室の実施により、知識の提供と有効な運動方法の指導を行うこととした。健診時の健康チェックに参加した母親に参加を募り、2017年9月より実施している。2017年12月時点で参加者は26名となっている。以下に実施内容を報告する。

#### ■腰痛予防教室の概要

定員を10名前後とし、90分単発の内容で月1回実施した。託児所を設置し、母親が子どもと離れて自身の健康を見直す環境づくりに配慮した。内容としては、右記のパンフレットを使用し、産前産後の腰痛・骨盤帯痛に対する知識提供、適切な育児動作の指導、ストレッチング・トレーニングの指導を行った。また、個別対応の時間も設けることで、個々に対応できる内容とした。

#### ■参加者の声

「本当に妊娠してからストレッチなんてしていなかったもので、とても気持ちよくスーッとしました。」

「ストレッチをととても詳しく説明していただいたり、近くで実際支えてもらいながらだったので正しく学ぶことができ、安心して家でも継続的に実践したいと思いました。」

「産後まだ運動もしていなく、腰に負担かけてばかりだったので少しでも軽減できる動きを教えてくださいありがとうございます。」

### [おわりに]

前年度に引き続き、多くの方に参加していただき、このような機会への関心の高さに加え、様々な健康上悩みを抱えている実態が伺えた。その実状の中でも多くの母親は家事や育児に多忙な日々を送っているため、健診に併せての実施や託児所の設置など参加しやすい環境づくりが引き続き必要だといえる。腰痛予防教室に関しては少人数制で行ったことにより、目の行き届く状態で実施できた。しかし、腰痛に対する効果などフォローアップが不十分であるため、今後は効果判定を行い、実施内容の改善を行っていくことが必要である。

**産前・産後の腰痛・骨盤痛**  
なぜ起こるの？

- ホルモンの変化  
体内でのホルモンの変化を原因とし、骨盤や筋肉が柔らかくなりやすくなるため、日常生活での姿勢の変化や筋力低下が原因となりやすくなります。また、産後にはホルモンの分泌が減少し、骨盤の柔軟性が低下します。また、産後にはホルモンの分泌が減少し、骨盤の柔軟性が低下します。
- 姿勢の変化  
妊娠による体重のふくらみにより、重心の位置が変化し、姿勢が崩れやすくなります。また、産後には重心の位置が変化し、姿勢が崩れやすくなります。
- 妊娠・出産によってダメージを受ける筋肉  
妊娠による体重のふくらみや姿勢の変化により、腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。
- 体の柔軟性  
産後の腰痛や骨盤帯痛の原因は、体の柔軟性が低いこと、筋力低下が原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。
- 子育て動作  
子どもを抱いたり、おむつ替えや授乳などの動作によって、腰に負担がかかります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。

**産前・産後の腰痛・骨盤痛**  
なぜ起こるの？

● ホルモンの変化  
体内でのホルモンの変化を原因とし、骨盤や筋肉が柔らかくなりやすくなるため、日常生活での姿勢の変化や筋力低下が原因となりやすくなります。また、産後にはホルモンの分泌が減少し、骨盤の柔軟性が低下します。また、産後にはホルモンの分泌が減少し、骨盤の柔軟性が低下します。

● 姿勢の変化  
妊娠による体重のふくらみにより、重心の位置が変化し、姿勢が崩れやすくなります。また、産後には重心の位置が変化し、姿勢が崩れやすくなります。

● 妊娠・出産によってダメージを受ける筋肉  
妊娠による体重のふくらみや姿勢の変化により、腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。

● 体の柔軟性  
産後の腰痛や骨盤帯痛の原因は、体の柔軟性が低いこと、筋力低下が原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。

● 子育て動作  
子どもを抱いたり、おむつ替えや授乳などの動作によって、腰に負担がかかります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。また、産後には腰痛や骨盤帯痛の原因となります。

**\*\*抱っこ、授乳、おむつ替え  
…育児にまつわる身体の負担\*\***

いくつかが入りますか？

- 抱っこや授乳の姿勢が正しいか
- 授乳の姿勢が正しいか
- おむつ替えの姿勢が正しいか
- 抱っこや授乳の姿勢が正しいか
- 授乳の姿勢が正しいか
- おむつ替えの姿勢が正しいか

**ストレッチ**  
産後の腰痛予防のためのストレッチ

- 腰のストレッチ  
1: 膝を曲げて、足先を揃え、手を腰に置き、ゆっくりと体を前に倒す。
- 胸のストレッチ  
1: 大きなクッションなどの上に寝て、足を伸ばし、両手を伸ばす。
- 足のストレッチ  
1: 大きなクッションなどの上に寝て、足を伸ばし、両手を伸ばす。

**エクササイズ**  
産後の腰痛予防のためのエクササイズ

Step1  
準備運動: 骨盤底筋群を活性化してあげよう。

Step2  
インナーマッスルを鍛えて、エクササイズしていきましょう。

# 「慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における呼吸機能評価」活動報告

神戸在宅呼吸ケア勉強会 神戸大学大学院保健学研究科 澤田 拓也

[はじめに]

本邦では、少子高齢化が進行するとともに呼吸器疾患患者も増加の一途を辿っている。高齢者の呼吸器疾患は慢性化する場合が多く、在宅において継続したケアを必要としている。慢性呼吸器疾患をもつ在宅高齢者は、日常生活の中でも低酸素状態に陥りやすく、生活の質（以下 QOL）を維持していくためには低酸素状態の予防が重要である。

日常生活の中でも、入浴動作は特に負荷の大きい動作として知られている。慢性呼吸器疾患患者にとって入浴動作は低酸素状態に陥りやすく、医療従事者による動作指導や適切な介助が重要であるが、そのためには患者がどのタイミングで低酸素状態となっているのか評価する必要がある。慢性呼吸器疾患患者の低酸素状態を評価する方法の1つとして、パルスオキシメータを使用した経皮的動脈血酸素飽和度（以下 SpO<sub>2</sub>）の測定が広く用いられている。しかし、一般的なパルスオキシメータには防水機能がないため、入浴中の SpO<sub>2</sub>測定は困難という現状があった。

近年、防水タイプのパルスオキシメータが開発され、入浴中の SpO<sub>2</sub>測定が可能となった。そこで我々は神戸在宅呼吸ケア勉強会に参加している在宅医療従事者に連携を依頼し、在宅慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における SpO<sub>2</sub>測定を実施した。この測定によって入浴中に低酸素状態となるタイミングを明らかにした上で、在宅医療従事者にフィードバックを行い、より質の高い呼吸ケアの提供を試みた。

[神戸在宅呼吸ケア勉強会の概要]

神戸在宅呼吸ケア勉強会は、平成24年12月に兵庫県内での在宅呼吸ケアネットワーク構築および呼吸ケアスキルの底上げを図ることを目的に発足し、医療従事者を対象に定例勉強会（1回/月）や研修会（4回/年）を開催している [図1]。また、定例勉強会は基礎的な内容が中心であるため、受講後も継続した学べる場の提供が必要である。我々は、さらなる技術向上およびネットワーク構築を目的としたフォローアップ研修会も開催している。

神戸在宅呼吸ケア勉強会は、発足から6年が経過し、兵庫県の訪問看護ステーション約100事業所とのネットワークを構築している。



図1 定例勉強会の様子

[入浴における SpO<sub>2</sub>の評価]

神戸在宅呼吸ケア勉強会に参加している、神戸地域の訪問看護ステーション・リハビリテーション施設の医療従事者と連携し、在宅慢性呼吸器疾患患者17名の入浴動作を評価した。入浴中の SpO<sub>2</sub>測定には防水パルスオキシメータを使用し [図2]、入浴前（脱衣前）3分間、入浴中、入浴後（着衣後）3分間の SpO<sub>2</sub>を連続的に測定した。入浴動作は脱衣、入湯、洗髪、洗顔、洗体、体拭き、着衣の7動作に分割し、各動作で最も低い値を示した SpO<sub>2</sub>を記録した。記録した SpO<sub>2</sub>のトレ

ンドグラフの1例を示す [図3]。17名の測定データの平均値を算出し、各動作の最も低い SpO<sub>2</sub>を比較した結果、一般的に低酸素状態をきたしやすいと言われている洗髪・洗体動作よりも着衣動作がより低い SpO<sub>2</sub>を示すという結果となった。



図2 防水パルスオキシメータ

#### [入浴における介助の有無]

着衣動作が最も低い SpO<sub>2</sub>を示した要因を調査するため、各入浴動作における医療従事者の介助の有無を調査した。その結果、洗髪・洗体動作は80%以上の方が介助有りで行っているのに対し、着衣動作を介助有りで行っている人は過半数に満たなかった。着衣動作は、洗髪・洗体動作と同様に、慢性呼吸器疾患患者にとって負荷の大きい上肢挙上動作や腹部圧迫動作を含んでいるが、医療従事者の介助は入浴中の洗髪・洗体動作に注力しており、入浴後の着衣動作は見逃される傾向があることが判明した。

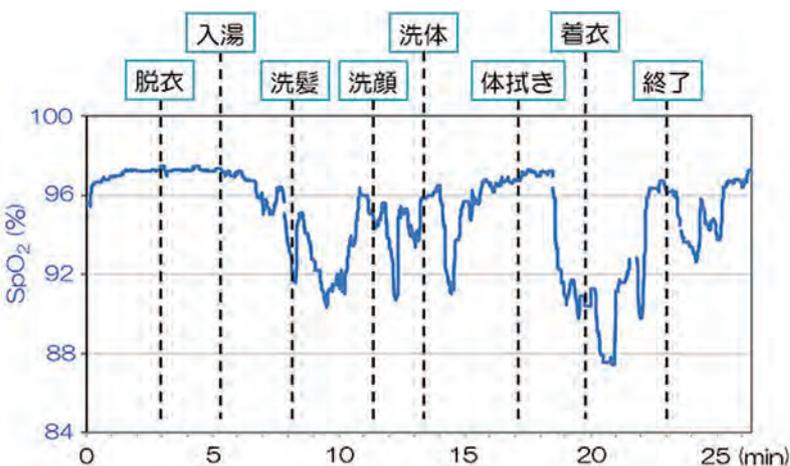


図3 入浴中の SpO<sub>2</sub>トレンドグラフ

この結果を在宅医療従事者にフィードバックしたところ、「入浴中よりも服を着ている時の方が低酸素になっていることは意外だった」、「髪や体を洗う動作は、低酸素にならないように指導していたが、服は自分のペースで着てもらっていたので、ここまで低酸素になっているとは思わなかった」等の意見をいただいた。入浴に関する動作指導や介助は、洗髪・洗体動作のみでなく、着衣動作まで含めて行う必要があることが明らかとなった。

#### [終わりに]

今年度の活動では、これまで評価することが困難であった慢性呼吸器疾患患者の入浴動作に焦点を当て、入浴介助や動作指導における課題を明らかにすることができた。入浴動作は、慢性呼吸器疾患患者にとって負荷の大きい動作であるが、入浴習慣は日本人にとって QOL を維持するためにも欠かせないものである。負荷が大きいから入浴を避けるのではなく、医療従事者の動作指導や介助の下に安全な入浴を行っていくことが、慢性呼吸器疾患患者の QOL を維持していくために重要である。

今回は、入浴中に低酸素状態となりやすいタイミングを明らかにした。この結果を元に、今後は地域の在宅医療従事者ととも適切な動作指導方法や介助方法の検討を行い、実際に介入を行うことで慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における低酸素状態を予防できるように努めていきたい。

# 平成29年度 学内公募事業 募集要項

## 平成29年度「地域連携事業」募集要項

1. 目的  
各部局等で計画している地域連携事業に要する経費の一部を支援することにより、本学の地域連携事業の一層の推進・発展を図ることを目的とします。
2. 対象テーマ  
地域活性化について、自治体・地域団体等と連携した活動
3. 対象取組事業  
部局の支援のもとに下記の①～③いずれかに該当する事業を対象とします。
  - ① 協定締結に基づく、もしくは協定締結につながる取組事業
  - ② 自治体等や地域団体と協同で行う萌芽的事業
  - ③ 複数部局による取組事業注) ただし、以下の部局を除く。
  - ・人文学研究科
  - ・人間発達環境学研究科
  - ・保健学研究科
  - ・農学研究科

※ 兵庫県内を中心とした活動が望ましい。  
※ 昨年度までの採択例については産学官連携グループまでお問い合わせ下さい。
4. 支援額及び採択件数（予定）  
支援額 1事業につき 30万～70万円  
採択件数 3～6件
5. 対象  
全部局及び各センター（地域連携センター及び同センター設置部局、人間発達環境学研究科を除きます。）
6. 公募期間及び結果通知  
受付期間：平成29年3月24日（金）～4月18日（火）  
結果通知：平成29年5月中旬
7. 提出書類
  - ①平成29年度「地域連携事業」申請書
  - ②所要経費内訳書  
※地域連携推進室ホームページより様式をダウンロードできます。
8. 対象事業経費  
謝金、旅費、印刷費、会議費（会場使用料、機材使用料等）、消耗品費等  
※光熱水費、備品費、飲食費等の経費は対象外です。  
※当該活動の中で教育研究を受ける学生に対する謝金の支払いは不可です。
9. 事業報告
  - ① COC+ 報告会（12～1月頃開催予定）でのプレゼンテーション
  - ② 平成29年度地域連携活動報告書（平成30年3月発行予定）に掲載する実施報告の提出（平成30年2月中旬までに提出願います）
  - ③ 下記報告書類の提出  
（所定の様式により平成30年4月中旬までに提出願います）
    - ・実施報告書 1部
    - ・実施経費経理報告書 1部

### 提出及び問い合わせ先

連携推進課 産学官連携グループ（山村）  
Tel : 078-803-5391  
e-mail : [ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp](mailto:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp)  
ホームページ : <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

### 《選考》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め8名程度で構成する審査委員会で、次の方針に基づいて審査します。

### 審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。
- ② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確化され、かつ実現性の確保に適切な配慮がなされているか。
- ③ 自治体や他大学、NPO等と部局を挙げての組織的な連携を図る取り組みとなっているか。
- ④ 地域連携の取り組みが大学の教育・研究に結びついているか。
- ⑤ 他の地域のモデルとなり得るような先導的取組であるか。
- ⑥ 地域文化の振興、育成した人材の定着・活用及び地域の活性化につながるような取り組みとなっているか。
- ⑦ 今後の展開の見通しが確実なものであると考えられるか。
- ⑧ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

## 平成29年度「学生地域アクションプラン」募集要項

1. 趣旨  
地域を元気にする学生の様々な活動は、地域に歓迎され、また、期待されています。神戸大学地域連携推進室では、地域に根ざした、地域を活性化しようとする学生の活動を支援するため、「学生地域アクションプラン」を公募します。
2. 募集対象  
学生の力を活かし、地域社会と連携して地域を活性化しようとするための活動。  
ただし、特定の政治、宗教、営利等の活動を目的としないこと。  
※ 兵庫県内の活動であることが望ましい。
3. 応募資格  
神戸大学の学生が主体となって組織され、活動を支援する教員と共に地域活性化のための取組みを行う団体。  
※ 事業責任者（申請者）は、教員とします。
4. 支援額及び採択件数（予定）  
申請上限額は25万円とし、2～5件の採択を予定しています。
5. 支援対象経費
  - ① 謝金：講演会の講師等に支払う謝金等（学生への支払いは不可）
  - ② 旅費：講演会の講師等に支払う交通費及び宿泊費等
  - ③ 印刷費：ポスター、チラシ、報告書の製本・印刷費等
  - ④ 会議費：学外施設の会場使用料等
  - ⑤ 消耗品費：文房具、製作用資材等※ 予算配分は、申請教員に対して行いますので、同教員により執行していただきます。
6. 公募受付期間  
平成29年3月24日（金）～4月18日（火）
7. 結果通知及び事業費配分予定  
平成29年5月  
※ 採択、非採択に関わらず、すべての申請教員及び代表学生に結果を書面で通知します。
8. 提出書類
  - ① 平成29年度「学生地域アクションプラン」申請書
  - ② 団体概要（会則、構成員名簿等）
  - ③ 活動企画書
  - ④ 収支予算書※ 地域連携推進室 Web ページから様式をダウンロードして下さい。  
※ 書類作成にあたって不明な点があれば、別記問合せ先までご連絡ください。
9. 提出先  
研究推進部連携推進課産学官連携グループ  
(文理農キャンパス正門すぐ 学術・産業イノベーション創造本部棟5階事務室)
10. 事業報告（採択者に義務が生じます）
  - ① COC+ 報告会（12～1月開催予定）でのプレゼンテーション
  - ② 平成29年度地域連携活動報告書（平成30年3月発行予定）に掲載する実施報告の提出（平成30年2月中旬までに提出願います）
  - ③ 下記報告書類の提出  
(所定の様式により平成30年4月中旬までに提出願います)
    - ・実施報告書 1部
    - ・実施経費経理報告書 1部

### 問い合わせ先

連携推進課 産学官連携グループ（山村）  
Tel : 078-803-5391  
e-mail : [ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp](mailto:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp)  
ホームページ : <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

### 《選考について》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め、8名程度で構成する選定委員会で、次の方針に基づき選考します。

### 審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。
- ② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確にされ、かつ実現性の確保に適切な配慮がされているか。
- ③ 自治体や地域住民、NPO等と協働で実施する組織的な連携を図る取り組みとなっているか。
- ④ 地域における活動が実施団体等の構成員の地域貢献に対する意識の向上に繋がっているか。
- ⑤ 地域における保健・福祉、社会教育、まちづくり、学術・文化・芸術又はスポーツの振興、環境保全、地域安全等に貢献する活動であるか。
- ⑥ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

※ 申請書の電話番号等の情報は、申請団体との連絡を目的としており、これ以外には使用しません。



# 付 録



—第21号—

# 地域・だいがく連携通信

## —神戸大学地域連携ニュース—

神戸大学地域連携推進室  
〒657-8501  
神戸市灘区六甲台町1-1  
TEL : 078-803-5391  
FAX : 078-803-5389  
E-mail : ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

### COC+事業が3年目を迎えました

文部科学省の事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」が本年度で3年目を迎えました。平成29年6月29日には外部評価委員会を開催しました。今後、さらなる事業の充実に向け取り組んでいきます。

#### 地域をフィールドにした教育・研究活動

地域課題を「歴史と文化」「自然と環境」「子育て高齢化対策」「安心安全な地域社会」「イノベーション」の5つに分け、専門性のある実践力を持った人材の育成に取り組んでいます。その一つに、これまで培ってきた知の成果を持ち寄り、今後の人材育成に役立てるため、『シリーズ地域づくりの基礎知識』の刊行を予定しています。平成29年10月からは、全学共通授業科目の中で、「地域社会形成基礎論」、「ひょうご神戸学」をスタートさせます。さらに、地域を志向した科目を「地域志向科目」として指定し、教育プログラムの充実を目指します。

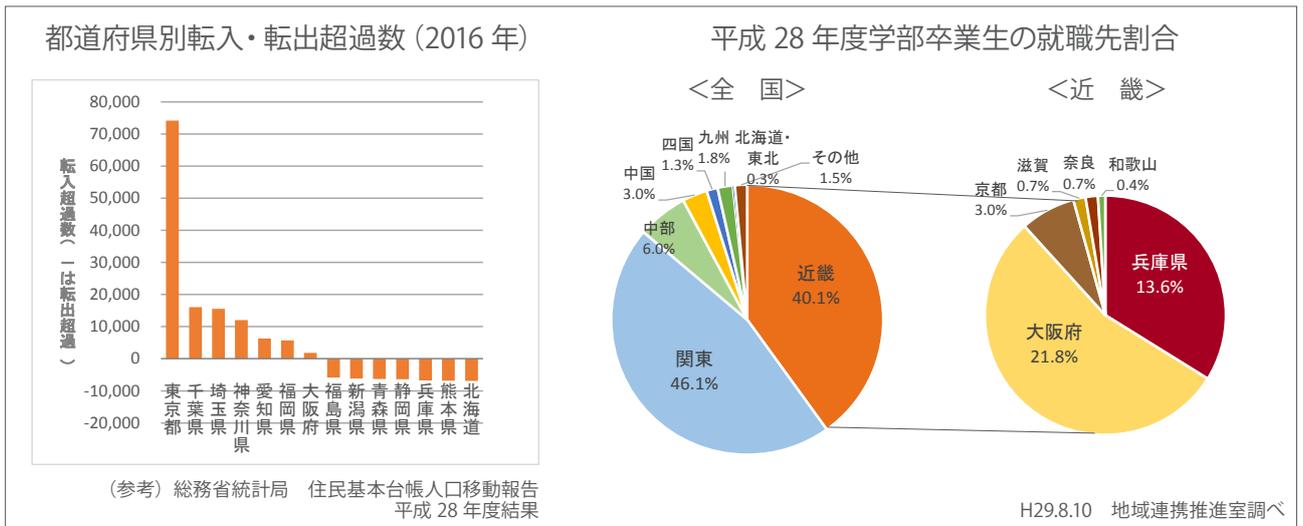
**ひょうご神戸学 (1単位)**  
地域社会の基盤や地域が直面している課題について、経済・環境・福祉・歴史・法律などの各分野からアプローチし、理解を深めます。地域再生や地域づくりの取り組みを皆さんとともに検討したいと思います。  
月曜日5限(17:00~18:30)  
第3Q 10/2 第4Q 12/4  
スタート!

**地域社会形成基礎論 (1単位)**  
ひょうご・神戸地域における経済・地理・歴史・気象などの観点から、兵庫県・神戸市の現状を知り、課題を見出します。将来、皆さんも地域再生や地域づくりの担い手になってみませんか?  
木曜日5限(17:00~18:30)  
第3Q 10/5 第4Q 12/7  
スタート!

科目区分 総合科目 I  
開講時期 平成29年度 第3クォーター  
平成29年度 第4クォーター  
開講教室 B208教室  
※第3、4クォーターの内容は同じです。  
神戸大学 地域連携推進室

#### 地域創生との関係は?

2016年の兵庫県の転出超過数は、6,760人と全国ワースト3となっており、県内における若者の地元定着は喫緊の課題となっています。一方、神戸大学の学部卒業生(平成28年度)の県内への就職先の割合は、13.6%となっています。COC+事業では学生に対し、地域の魅力を知ってもらうために、中山間地域においてインターンシップ型プロジェクトを実施したり、この秋には、普段訪れることの少ない但馬地域へ訪問するバスツアーの企画などを行っています。本学においても、様々な教員が地域創生に資する教育・研究を行っています。



#### 神戸大学の「知」を地域へ

昨今、「地域創生」が掲げられ、地域における安定した雇用の創出や、地方の人口減少への歯止めが目指されています。そういった中、イノベーションの原動力となる知と若者が集まる大学への期待は高まっています。本学には、地域をフィールドに先導的な活動をしている教員や学生がたくさんいます。そうした活動をより「見える化」し、地域の中での大学の存在価値を高めていけるよう、地域連携推進室はその橋渡しをしていきたいと思えます。関心をお持ちの方は、ぜひとも地域連携推進室にお声かけください。

## 地域と学生をつなぐ～実践農学の現場から～

COC+自然と環境領域 木原 弘恵コーディネーター



神戸大学では、地域の皆さんの協力を得て、篠山市で、「実践農学入門」や「実践農学」を全学対象に開講しています。平成28年度よりインターンシップ型プロジェクトを導入した「実践農学」について、コーディネーターの木原さんにお話を伺いました。

### ―実践農学ではどのようなプロジェクトを進めているのでしょうか。

平成29年度は、調査プロジェクトとインターンシップ型プロジェクトとして4つのプロジェクトを進めています。私はそのうち、特産品メニューに開発に向けた調査(JA丹波ささやま)と地域の魅力発見マップづくり(大芋地区)の2つを担当しています。



JA丹波ささやまでのプロジェクトの様子

### ―篠山をフィールドにしたプロジェクトのようですが、どのようなことがきっかけで企画が立ち上がるのでしょうか。

まず、担当教員とコーディネーターが、どこに受け入れをお願いするか話し合うところからスタートします。地域の状況や、どういうところが受け入れてくれそうか、また学生の学びに繋がりそうか検討しています。ある程度候補が決まったら、先方に受け入れの可否をお伺いして、決まればそこから具体的な計画を立てます。

### ―準備が大変そうですね。

一般的なインターンシップのように企業に一定期間学生を預けるというのではなく、中山間地域の課題解決に向けたプロジェクトに携わるのが特徴です。その際、受け入れ先の方が引き受けられる形で、かつ大学としてもサポートできるようなプロジェクトに落とし込むのが非常に重要なポイントです。たとえば今回は、私もJAの中期計画などを読み、いくつか実現可能なものを受け入れ先と協議し、プロジェクト案を作りました。

### ―活動している学生の様子は

大芋地区では、自転車でめぐる観光ツアーに利用できるようなマップ作成のプロジェクトを実施しています。



公民館での聞き取りの様子

名所を廻るだけではなく、その地域内の場所に関するエピソードをマップに落とし込むことに挑戦しています。8月19日には、大芋地区の藤坂地域の方に公民館に集ってもらい学生がお話を伺う機会を設けましたが、20人近くの地域の方々が集まって下さいました。昨年度実践農学入門を大芋地区で実施したので、農家の方との関わりがありました。それ以外の方に関わる良い機会になったのではないかと思います。お風呂に入るのに近所の方にもらい湯にも行きました。

### ―コーディネーターとして感じることは。

このインターンシップ型プロジェクトを始めて2年目ですが、各コーディネーターの裁量に任せられることが多く、継続的に実施するにはまだまだ課題もあると考えています。特に、授業として実施しているため、評価が必要となってきますが、プロジェクトごとに内容が大きく異なるので、同じ指標で、どう図っていくのかも、難しいところです。これらをどう改善していくか、これからの課題だと思います。

また、学生と地域の方との付き合いには、コーディネーターのフォローが必要な場面もあります。受け入れ先の方々に負担をかけず、学生にも教育効果のあるようにプロジェクトを進められるよう心がけています。

### ―多くの手間や工夫をおこなった取組だということが分かりました。



大芋地区でのプロジェクトの様子

## KOBE 学生ワークショップに参加

神戸市主催の「神戸の未来をつくる KOBE 大学生ワークショップ」に、本学から、12名の学生が申し込みました。ワークショップは、市内外の大学生が6～7名のグループに分かれ、「大学交流拠点」、「大学生等のポータルサイト」のいずれかのテーマについて議論をし、学生視点のアイデアを提案するものです。アイスブレイク、グループワークを含む全3回のワークショップを経て、平成29年8月9日には、市長の前で提案発表を行いました。

台風の影響で試験の補講とワークショップの最終日が重なり、残念ながら出席できない学生もいましたが、リーダーシップを発揮しながらグループをまとめるなど積極的に臨む本学学生の姿が見られました。

提案発表会では、ポータルサイトへのアクセスを増やすための工夫や、大学交流拠点への提案として、「刺激が欲しいが、ほんの一步が踏み出せない暇な大学2回生」といった具体的なターゲットを定めて提案を行ったグループなどがあり、学生の生の声を市政に届ける有意義な機会となりました。



ワークショップの様子



提案発表会の様子

## 兵庫県文化遺産防災研修会を開催

平成29年7月5日、地震や風水害などの自然災害から地域の文化財や展示物を守るため、関係機関による県内相互支援体制の構築に向けた情報共有を目的に、「兵庫県文化遺産防災研修会」を開催しました。本研修会には、兵庫県内の文化財担当職員や博物館・資料館学芸員ら27機関57名から参加がありました。

研修会では、まず第1講として兵庫県教育委員会文化財課長の山下史朗氏より「兵庫県の文化財防災体制について」と題し、兵庫県を中心とする文化財防災体制確立へむけた取り組みの経緯を述べられ、現在ではすべての文化財（未指定含む）

を対象に近畿圏レベルで相互応援する被災対応ガイドラインが関西広域連合で議論されていることが紹介されました。第2講は神戸市危機管理室計画担当課長の清水陽氏より「神戸市の防災体制について」と題し、神戸市の地域防災計画の取り組みを講じられ、近い将来には市教委文化財課とも連携して計画に文化財への対応を盛り込んでいけるよう話し合っていく旨を述べられました。第3講として本学地域連携推進室長の奥村弘氏より「地震等災害後の文化遺産防災を進めるために」と題し、阪神・淡路大震災から東日本大震災にいたる大規模地震災害や平成16年以降の大規模水害時の文化遺産保全活動の取り



会場の様子



発表者の方々

組みを歴史資料ネットワークの活動とともに紹介し、被災地の再建には過去と現在の記憶を未来につなぐ文化財を「地域歴史遺産」として日常的に保全していく事の重要性を述べました。最後に第4講として本学地域連携推進室特命准教授の松下正和氏より「兵庫県内での風水害による水損史料救出活動について」と題し、平成16年以来本格的に対応を始めた被災資料の保全活動について具体的に講義しました。

シンポジウム形式のディスカッションを行った後、最後に、神戸市教育委員会文化財課長の千種浩氏から閉会の挨拶が述べられました。

## 平成 29 年度地域連携 学内公募事業

地域連携推進室では、学内の新しい地域連携の芽を育てるため、教職員や学生による地域活性化のための活動を支援しています。今年度は、次の各事業が採択されました。

### ● 地域連携事業（教職員対象）

国際文化学研究科	映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携
国際文化学研究科	「神戸空襲を記録する会」戦災資料に関する学術的調査・整理および利用提言
経済学研究科	複数大学の連携による地域創生事業
工学研究科	高倉台団地再生・活用プロジェクト
工学研究科	被災地定点観測を通じた多世代災害語り継ぎと手法の開発

### ● 学生地域アクションプラン（学生対象）

神戸大アートマネジメント研究会	こどものためのコンサート第10弾
神戸学生森林整備隊	神戸市キーナの森における里山の資源利用の普及と継承
AGLOC	地域と世界をつなぎ、篠山の魅力を世界へ
プロジェクト福良	プロジェクト福良
母子健康応援プロジェクト	母子にやさしい街づくり
神戸在宅呼吸ケア勉強会	慢性呼吸器疾患患者の入浴動作における呼吸機能評価

## 平成 29 年度 神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成

灘区との連携協定に基づき、教職員・学生からなる組織を対象に「地域の課題解決および魅力向上を目的として実施する活動・事業」に対して灘区が助成を行っています。今年度の採択事業は次のとおりです。

人間発達環境学研究科（教職員）	鶴甲いきいきまちプロジェクト
まちプロジェクト実行委員会（学生）	まちプロジェクト 一まちTフェス'17ー
灘区地域活動センター（N.A.C）（学生）	灘区内の災害復興住宅の集会所におけるふれあい喫茶の運営や戸別訪問活動
神戸大学天文研究会	なだ星まつり

## 活動報告（平成 29 年 3 月～ 9 月）

3月	06日	(大学)	大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（灘区公募事業）公募開始
	10日	(保健)	保健学研究科地域連携センターシネマカフェ「モーツァルトとクジラ」
	23日	(大学)	平成 28 年度第 2 回 COC + 推進委員会 平成 28 年度第 4 回地域連携推進室会議
	24日	(大学)	地域連携事業・学生地域アクションプラン公募開始
	27日	(大学)	平成 28 年度神戸大学地域連携活動報告書を発行
5月	18日	(大学)	平成 29 年度第 1 回地域連携推進室会議
	21日	(人文)	まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来
6月	16日	(理学)	理学研究科での FD 実施
	21日	(海事)	海事科学研究科での FD 実施
	29日	(大学)	第 1 回ひょうご神戸プラットフォーム外部評価委員会
7月	05日	(人文)	兵庫県文化遺産防災研修会
	18日	(大学)	第 3 回ひょうご神戸プラットフォーム協議会
	25日	(農学)	農学研究科地域連携研究セミナー（A-Launch）「動物系研究者が良く間違える統計」
8月	04日	(農学)	農学研究科での FD 実施
9月	06日	(人文)	人文学研究科での FD 実施
	16日	(人文)	企画展 明石藩の世界 V 「明石藩の幕末維新」（～ 10/22）

---

---

平成 29 年度 神戸大学地域連携活動報告書

平成 30 年 3 月発行

発 行 神戸大学 地域連携推進室

連絡先 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

Tel:078-803-5391 Fax:078-803-5389

Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印 刷 田中印刷出版(株)

---

---